

測量・調査業務等委託契約新旧対照表

改正前	改正後
測量・調査 <u>等請負</u> 契約書	測量・調査 <u>業務等委託</u> 契約書
1 <u>作業</u> の名称	1. <u>委託業務</u> の名称
2 <u>履行場所</u>	2. <u>履行場所</u>
3 <u>履行期間</u> <u>令和</u> 年 月 日から <u>令和</u> 年 月 日まで	3. <u>履行期間</u> <u>(削除)</u> 年 月 日から <u>(削除)</u> 年 月 日まで
4 <u>請負代金額</u> 金 円 うち取引に係る消費税及び地方消費税に相当する額 金 円 (受注者が課税業者である場合に限り、記入してください。)	4. <u>業務委託料</u> 金 円 うち取引に係る消費税及び地方消費税に相当する額 金 円 (受注者が課税業者である場合に限り、記入してください。)
5 <u>契約保証金</u> 金 円 ただし、現金 金 円 代用証券 金 円 (内訳別紙明細書のとおり)	5. <u>契約保証金</u> 金 円 ただし、現金 金 円 代用証券 金 円 (内訳別紙明細書のとおり)
上記の委託業務について、発注者と受注者は、各々の対等な立場における合意に基づいて、別添の条項によって公正な委託契約を締結し、信義に従って誠実にこれを履行するものとする。 <u>(追加)</u>	上記の委託業務について、発注者と受注者は、各々の対等な立場における合意に基づいて、別添の条項によって公正な委託業務を締結し、信義に従って誠実にこれを履行するものとする。 <u>また、受注者が設計共同体を結成している場合には、受注者は、別紙の設計共同体協定書により契約書記載の業務等を共同連帯して実施する。</u>
本契約の証として本書 <u>2</u> 通を作成し、発注者及び受注者が記名押印の上、各自 <u>1</u> 通を保有する。 <u>令和</u> 年 月 日	本契約の証として本書 <u>2</u> 通を作成し、発注者及び受注者が記名押印の上、各自 <u>1</u> 通を保有する。 <u>(削除)</u> 年 月 日
発注者 住所 氏名 印	発注者 住所 氏名 印
受注者 住所 氏名 印	受注者 住所 氏名 印

改正前	改正後
<p>(総則)</p> <p>第1条 発注者及び受注者は、この約款(契約書を含む。以下同じ。)に基づき、別冊の仕様書(金額記載しない設計書、図面及び現場説明書を含む。以下同じ。)に従い、(追加)この契約(この約款及び仕様書を内容とする作業の請負契約をいう。以下同じ。)を履行しなければならない。</p> <p>2 受注者は、契約書記載の作業(以下「作業」という。)を契約書記載の履行期間(以下「履行期間」という。)内に完了し、契約の目的物(以下「成果物」という。)を発注者に引き渡すものとし、発注者は、その請負代金を支払うものとする。</p> <p>3 仕様書に明示されていないものについて疑義があるときは、発注者と受注者とが協議して定めるものとする。</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(秘密の保持)</p> <p>第33条 受注者は、作業の処理上知り得た秘密を他人に漏らしてはならない。</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p>	<p>(総則)</p> <p>第1条 発注者及び受注者は、この契約書(頭書を含む。以下同じ。)に基づき、設計図書(別冊の図面、仕様書、現場説明書及び現場説明に対する質問回答書をいう。以下同じ。)に従い、日本国の法令を遵守し、この契約(この契約書及び設計図書を内容とする業務等の委託契約をいう。以下同じ。)を履行しなければならない。</p> <p>2 受注者は、契約書記載の業務等(以下「業務等」という。)を契約書記載の履行期間(以下「履行期間」という。)内に完了し、契約の目的物(以下「成果物」という。)を発注者に引き渡すものとし、発注者は、その業務委託料を支払うものとする。</p> <p>(削除)</p> <p>3 発注者は、その意図する成果物を完成させるため、業務等に関する指示を受注者又は受注者の主任技術者(主任技術者を設置する場合に限る。以下同じ。)に対して行うことができる。この場合において、受注者又は受注者の主任技術者は、当該指示に従い業務等を行わなければならない。</p> <p>4 受注者は、この契約書若しくは設計図書に特別の定めがある場合又は前項の指示若しくは発注者と受注者との協議がある場合を除き、業務等を完了するために必要な一切の手段をその責任において定めるものとする。</p> <p>5 受注者は、この契約の履行に関して知り得た秘密を(削除)漏らしてはならない。</p> <p>6 この契約の履行に関して発注者と受注者との間で用いる言語は、日本語とする。</p> <p>7 この契約書に定める金銭の支払いに用いる通貨は、日本円とする。</p> <p>8 この契約の履行に関して発注者と受注者との間で用いる計量単位は、設計図書に特別の定めがある場合を除き、計量法(平成4年法律第51号)に定めるものとする。</p> <p>9 この契約書及び設計図書における期間の定めについては、民法(明治29年法律第89号)及び商法(明治32年法律第48号)の定めるところによるものとする。</p>

測量・調査業務等委託契約新旧対照表

改正前	改正後
<p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>10 この契約は、日本国の法令に準拠するものとする。</u></p> <p><u>11 この契約に係る訴訟の提起については、日本国の裁判所をもって合意による専属的管轄裁判所とする。</u></p> <p><u>12 受注者が設計共同体を結成している場合においては、発注者は、この契約に基づくすべての行為を設計共同体の代表者に対して行うものとし、発注者が当該代表者に対して行ったこの契約に基づくすべての行為は、当該共同体のすべての構成員に対して行ったものとみなし、また、受注者は、発注者に対して行うこの契約に基づくすべての行為について当該代表者を通じて行わなければならない。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(指示等及び協議の書面主義)</u></p> <p><u>第2条 この契約書に定める指示、催告、請求、通知、報告、申出、承諾、質問、回答及び解除（以下「指示等」という。）は、書面により行わなければならない。</u></p> <p><u>2 前項の規定にかかわらず、緊急やむを得ない事情がある場合には、発注者及び受注者は、同項に規定する指示等を口頭で行うことができる。この場合において、発注者及び受注者は、既に行った指示等を書面に記載し、7日以内にこれを相手方に交付するものとする。</u></p> <p><u>3 発注者及び受注者は、この契約書の他の条項の規定に基づき協議を行うときは、当該協議の内容を書面に記録するものとする。</u></p>
<p><u>(業務工程表等の提出)</u></p> <p><u>第2条 受注者は、この契約締結後14日以内に<u>仕様書</u>に基づき業務工程表等を作成し、発注者に提出するものとする。</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>2 業務工程表等は、発注者及び受注者を拘束するものではない。</u></p>	<p><u>(業務工程表(削除)の提出)</u></p> <p><u>第3条 受注者は、この契約締結後14日以内に<u>設計図書</u>に基づいて業務工程表(削除)を作成し、発注者に提出しなければならない。</u></p> <p><u>2 発注者は、必要があると認めるときは、前項の業務工程表を受理した日から7日以内に、受注者に対してその修正を請求することができる。</u></p> <p><u>3 この契約書の他の条項の規定により履行期間又は設計図書が変更された場合において、発注者は、必要があると認めるときは、受注者に対して業務工程表の再提出を請求することができる。この場合において、第1項中「この契約締結後」とあるのは「当該請求があった日から」と読み替えて、前2項の規定を準用する。</u></p> <p><u>4 業務工程表(削除)は、発注者及び受注者を拘束するものではない。</u></p>

改正前	改正後
<p>(契約の保証)</p> <p>第4条 受注者は、この契約の締結と同時に、次の各号のいずれかに掲げる保証を付さなければならない。ただし、第5号の場合においては、履行保証保険契約の締結後、直ちにその保険証券を発注者に寄託しなければならない。</p> <p><u>(1) 契約保証金の納付</u></p> <p><u>(2) 契約保証金の納付に代わる担保となる有価証券等の提供</u></p> <p><u>(3) この契約による債務の不履行により生ずる損害金の支払いを保証する銀行、発注者が確実と認める金融機関又は保証事業会社（公共工事の前払金保証事業に関する法律（昭和27年法律第184号）第2条第4項に規定する保証事業会社をいう。以下同じ。）の保証</u></p> <p><u>(4) この契約による債務の履行を保証する公共工事履行保証証券による保証</u></p> <p><u>(5) この契約による債務の不履行により生ずる損害をてん補する履行保証保険契約の締結</u></p> <p><u>2</u> 前項の保証に係る契約保証金の額、保証金額又は保険金額（第5項において「保証の額」という。）は、<u>請負代金額</u>の10分の1以上としなければならない。</p> <p><u>3</u> 受注者が第1項第3号から第5号までのいずれかに掲げる保証を付す<u>(追加)</u>場合は、当該保証は第29条第3項各号に規定する者による契約の解除の場合についても保証するものでなければならない。</p> <p><u>4</u> 第1項の規定により、受注者が同項第2号又は第3号に掲げる保証を付したときは、当該保証は契約保証金<u>の納付</u>に代わる担保の提供として行われたものとし、同項第4号又は第5号に掲げる保証を付したときは、契約保証金の納付を免除する。</p> <p><u>5</u> <u>請負代金額</u>の変更があった場合には、保証の額が変更後の<u>請負代金額</u>の10分の1に達するまで、発注者は、保証の額の増額を請求することができ、受注者は、保証の額の減額を請求することができる。</p>	<p>(契約の保証)</p> <p>第4条 受注者は、この契約の締結と同時に、次の各号のいずれかに掲げる保証を付さなければならない。ただし、第5号の場合においては、履行保証保険契約の締結後、直ちにその保険証券を発注者に寄託しなければならない。</p> <p><u>(1) 契約保証金の納付</u></p> <p><u>(2) 契約保証金の納付に代わる担保となる有価証券等の提供</u></p> <p><u>(3) この契約による債務の不履行により生ずる損害金の支払いを保証する銀行、発注者が確実と認める金融機関又は保証事業会社（公共工事の前払金保証事業に関する法律（昭和27年法律第184号）第2条第4項に規定する保証事業会社をいう。以下同じ。）の保証</u></p> <p><u>(4) この契約による債務の履行を保証する公共工事履行保証証券による保証</u></p> <p><u>(5) この契約による債務の不履行により生ずる損害をてん補する履行保証保険契約の締結</u></p> <p><u>2</u> 前項の保証に係る契約保証金の額、保証金額又は保険金額（第5項において「保証の額」という。）は、<u>業務委託料</u>の10分の1以上としなければならない。</p> <p><u>3</u> 受注者が第1項第3号から第5号までのいずれかに掲げる保証を付す<u>る</u>場合は、当該保証は第<u>52</u>条第3項各号に規定する者による契約の解除の場合についても保証するものでなければならない。</p> <p><u>4</u> 第1項の規定により、受注者が同項第2号又は第3号に掲げる保証を付したときは、当該保証は契約保証金<u>(削除)</u>に代わる担保の提供として行われたものとし、同項第4号又は第5号に掲げる保証を付したときは、契約保証金の納付を免除する。</p> <p><u>5</u> <u>業務委託料</u>の変更があった場合には、保証の額が変更後の<u>業務委託料</u>の10分の1に達するまで、発注者は、保証の額の増額を請求することができ、受注者は、保証の額の減額を請求することができる。</p>
<p>(権利義務の譲渡等<u>の禁止</u>)</p> <p>第3条 受注者は、この契約により生ずる権利<u>若しくは</u>義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、<u>(追加) 書面により</u>発注者の承諾を得た<u>ときは</u>、この限りでない。</p> <p><u>2</u> <u>発注者は、この契約の成果物を自由に使用し、又はこれを使用するに当たり、その内容等を変更することができる。</u></p>	<p>(権利義務の譲渡等<u>(削除)</u>)</p> <p>第5条 受注者は、この契約により生ずる権利<u>又は</u>義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、<u>あらかじめ、(削除)</u>発注者の承諾を得た<u>場合は</u>、この限りでない。</p> <p><u>(削除)</u></p>

改正前	改正後
<p><u>(秘密の保持)</u> <u>第 33 条</u> <u>2 受注者は、成果物を他人に閲覧させ、複製させ、又は譲渡してはならない。</u></p> <p>3 受注者が前払金の使用や部分払等によってもなおこの契約の履行に必要な資金が不足することを疎明したときは、発注者は、特段の理由がある場合を除き、受注者の業務委託料債権の譲渡について、第 1 項ただし書の承諾をしなければならない。</p> <p>4 受注者は、前項の規定により、第 1 項ただし書の承諾を受けた場合は、業務委託料債権の譲渡により得た資金をこの契約の履行以外に使用してはならず、またその用途を疎明する書類を発注者に提出しなければならない。</p>	<p>2 受注者は、成果物（未完成の成果物及び業務等を行う上で得られた記録等を含む。）を第三者に譲渡し、貸与し、又は質権その他の担保の目的に供してはならない。ただし、あらかじめ、発注者の承諾を得た場合は、この限りでない。</p> <p>3 受注者が前払金の使用や部分払等によってもなおこの契約の履行に必要な資金が不足することを疎明したときは、発注者は、特段の理由がある場合を除き、受注者の業務委託料債権の譲渡について、第 1 項ただし書の承諾をしなければならない。</p> <p>4 受注者は、前項の規定により、第 1 項ただし書の承諾を受けた場合は、業務委託料債権の譲渡により得た資金をこの契約の履行以外に使用してはならず、またその用途を疎明する書類を発注者に提出しなければならない。</p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(著作権の譲渡等)</u> <u>第 6 条 受注者は、成果物（第 39 条第 1 項に規定する指定部分に係る成果物及び同条第 2 項に規定する引渡部分に係る成果物を含む。以下この条及び第 8 条の 2 において同じ。）が著作権法（昭和 45 年法律第 48 号）第 2 条第 1 項第 1 号に規定する著作物（以下「著作物」という。）に該当する場合には、当該著作物に係る受注者の著作権（著作権法第 21 条から第 28 条までに規定する権利をいう。）を当該著作物の引渡し時に発注者に無償で譲渡するものとする。</u></p> <p><u>2 発注者は、成果物が著作物に該当するとしないとにかかわらず、当該成果物の内容を受注者の承諾なく自由に公表することができる。</u></p> <p><u>3 発注者は、成果物が著作物に該当する場合には、受注者が承諾したときに限り、既に受注者が当該著作物に表示した氏名を変更することができる。</u></p> <p><u>4 受注者は、成果物が著作物に該当する場合において、発注者が当該著作物の利用目的の実現のためにその内容を改変するときは、その改変に同意する。また、発注者は、成果物が著作物に該当しない場合には、当該成果物の内容を受注者の承諾なく自由に改変することができる。</u></p> <p><u>5 受注者は、成果物（業務等を行う上で得られた記録等を含む。）が著作物に該当するとしないとにかかわらず、発注者が承諾した場合には、当該成果物を使用又は複製し、また、第 1 条第 5 項の規定にかかわらず当該成果物の内容を公表することができる。</u></p>

改正前	改正後
	<p><u>6 発注者は、受注者が成果物の作成に当たって開発したプログラム（著作権法第10条第1項第9号に規定するプログラムの著作物をいう。）及びデータベース（著作権法第12条の2に規定するデータベースの著作物をいう。）について、受注者が承諾した場合には、別に定めるところにより、当該プログラム及びデータベースを利用することができる。</u></p>
<p><u>(下請負の禁止)</u> <u>第6条 受注者は、作業の処理を第三者に委任し、又は請け負わせてはならない。ただし、書面による発注者の承認を得た場合は、この限りではない。</u></p>	<p><u>(削除)</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(一括再委託等の禁止)</u> <u>第7条 受注者は、業務等の全部を一括して、又は設計図書において指定した主たる部分を第三者に委任し、又は請け負わせてはならない。</u></p> <p><u>2 受注者は、前項の主たる部分のほか、発注者が設計図書において指定した部分を第三者に委任し、又は請け負わせてはならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、業務等の一部を第三者に委任し、又は請け負わせようとするときは、あらかじめ、発注者の承諾を得なければならない。ただし、発注者が設計図書において指定した軽微な部分を委任し、又は請け負わせようとするときは、この限りでない。</u></p> <p><u>4 発注者は、受注者に対して、業務等の一部を委任し、又は請け負わせた者の商号又は名称その他必要な事項の通知を請求することができる。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(特許権等の使用)</u> <u>第8条 受注者は、特許権、実用新案権、意匠権、商標権その他日本国の法令に基づき保護される第三者の権利（以下「特許権等」という。）の対象となっている履行方法を使用するときは、その使用に関する一切の責任を負わなければならない。ただし、発注者がその履行方法を指定した場合において、設計図書に特許権等の対象である旨の明示がなく、かつ、受注者がその存在を知らなかったときは、発注者は、受注者がその使用に関して要した費用を負担しなければならない。</u></p>

改正前	改正後
<p>(新設)</p>	<p><u>(意匠の実施の承諾等)</u> <u>第8条の2 受注者は、自ら有する登録意匠（意匠法（昭和34年法律第125号）第2条第3項に定める登録意匠をいう。）を設計に用い、又は成果物によって表現される構造物若しくは成果物を利用して完成した構造物（以下「本件構造物等」という。）の形状等について意匠法第3条に基づく意匠登録を受けるときは、発注者に対し、本件構造物等に係る意匠の実施を無償で承諾するものとする。</u></p> <p><u>2 受注者は、本件構造物等の形状等に係る意匠登録を受ける権利及び意匠権を第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、あらかじめ、発注者の承諾を得た場合は、この限りでない。</u></p>
<p><u>(監督職員、主任技術者)</u> <u>第8条 発注者は、この契約の履行について自己に代わって監督し若しくは指示する監督職員を定め、また受注者は作業履行の技術上の管理をつかさどる主任技術者を定め、それぞれに通知するものとする。</u></p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p>	<p><u>(監督職員)</u> <u>第9条 発注者は、監督職員を置いたときは、その氏名を受注者に通知しなければならない。監督職員を変更したときも、同様とする。</u></p> <p><u>2 監督職員は、この契約書の他の条項に定めるもの及びこの契約書に基づく発注者の権限とされる事項のうち発注者が必要と認めて監督職員に委任したもののほか、設計図書に定めるところにより、次に掲げる権限を有する。</u></p> <p><u>(1) 発注者の意図する成果物を完成させるための受注者又は受注者の主任技術者に対する業務等に関する指示</u></p> <p><u>(2) この契約書及び設計図書の記載内容に関する受注者の確認の申出又は質問に対する承諾又は回答</u></p> <p><u>(3) この契約の履行に関する受注者又は受注者の主任技術者との協議</u></p> <p><u>(4) 業務等の進捗の確認、設計図書の記載内容と履行内容との照合その他この契約の履行状況の調査</u></p> <p><u>3 発注者は、2名以上の監督職員を置き、前項の権限を分担させたときにあっては、それぞれの監督職員の有する権限の内容を、監督職員にこの契約書に基づく発注者の権限の一部を委任したときにあっては当該委任した権限の内容を、受注者に通知しなければならない。</u></p> <p><u>4 第2項の規定に基づく監督職員の指示又は承諾は、原則として、書面により行わなければならない。</u></p> <p><u>5 この契約書に定める書面の提出は、設計図書に定めるものを除き、監督職員を経由して行うものとする。この場合においては、監督職員に到達した日をもって発注者に到達したものとみなす。</u></p>

測量・調査業務等委託契約新旧対照表

改正前	改正後
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(照査技術者)</u> <u>第 10 条 受注者は、設計図書に定める場合には、成果物の内容の技術上の照査を行う照査技術者を定め、その氏名その他必要な事項を発注者に通知しなければならない。照査技術者を変更したときも、同様とする。</u></p> <p><u>2 照査技術者は、次条第 1 項に規定する主任技術者を兼ねることができない。</u></p>
<p><u>(監督職員、主任技術者)</u> <u>第 8 条 発注者は、この契約の履行について自己に代わって監督し若しくは指示する監督職員を定め、また受注者は作業履行の技術上の管理をつかさどる主任技術者を定め、それぞれに通知するものとする。</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(主任技術者)</u> <u>第 11 条 受注者は、技術上の管理を行う主任技術者を定め、その氏名その他必要な事項を発注者に通知しなければならない。主任技術者を変更したときも、同様とする。</u></p> <p><u>2 主任技術者は、この契約の履行に関し、業務等の管理及び統轄を行うほか、業務委託料の変更、履行期間の変更、業務委託料の請求及び受領、第 14 条第 1 項の請求の受理、同条第 2 項の決定及び通知、同条第 3 項の請求、同条第 4 項の通知の受理並びにこの契約の解除に係る権限を除き、この契約に基づく受注者の一切の権限を行使することができる。</u></p> <p><u>3 受注者は、前項の規定にかかわらず、自己の有する権限のうちこれを主任技術者に委任せず自ら行使しようとするものがあるときは、あらかじめ、当該権限の内容を発注者に通知しなければならない。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(地元関係者との交渉等)</u> <u>第 12 条 地元関係者との交渉等は、発注者が行うものとする。この場合において、発注者の指示があるときは、受注者はこれに協力しなければならない。</u></p> <p><u>2 前項の場合において、発注者は、当該交渉等に関して生じた費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(土地への立ち入り)</u> <u>第 13 条 受注者が調査のために第三者が所有する土地に立ち入る場合において、当該土地の所有者等の承諾が必要なときは、発注者がその承諾を得るものとする。この場合において、発注者の指示があるときは、受注者はこれに協力しなければならない。</u></p>

改正前	改正後
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(主任技術者等に対する措置請求)</u> <u>第 14 条 発注者は、照査技術者若しくは主任技術者又は受注者の使用人若しくは第 7 条第 3 項の規定により受注者から業務等を委任され、若しくは請け負った者がその業務等の実施につき著しく不相当と認められるときは、受注者に対して、その理由を明示した書面により、必要な措置をとるべきことを請求することができる。</u></p> <p><u>2 受注者は、前項の規定による請求があったときは、当該請求に係る事項について決定し、その結果を請求を受けた日から 10 日以内に発注者に通知しなければならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、監督職員がその職務の執行につき著しく不相当と認められるときは、発注者に対して、その理由を明示した書面により、必要な措置をとるべきことを請求することができる。</u></p> <p><u>4 発注者は、前項の規定による請求があったときは、当該請求に係る事項について決定し、その結果を請求を受けた日から 10 日以内に受注者に通知しなければならない。</u></p>
<p><u>(報告義務等)</u> <u>第 5 条 発注者は、この契約の成果の一部を必要としたときは、受注者に対してその資料の提出を求めることができる。</u></p> <p><u>2 発注者は、必要と認めるときは、受注者に対して作業の処理状況につき、調査し、又は報告を求めることができる。</u></p>	<p><u>(履行報告)</u> <u>第 15 条 受注者は、設計図書に定めるところにより、この契約の履行について発注者に報告しなければならない。</u></p> <p><u>(削除)</u></p>
<p><u>(貸与品等)</u> <u>第 7 条 発注者が受注者に貸与し、又は支給する調査機械器具、図面その他業務 <u>(追加)</u> に必要な物品等（以下「貸与品等」という。）の品名、数量、品質、規格又は性能、引渡場所及び引渡時期は、<u>仕様書</u>に定めるところによる。</u></p> <p><u>2 受注者は、貸与品等の引渡しを受けたときは、引渡しの日から 7 日以内に、発注者に<u>借用書</u>又は<u>受領書</u>を提出しなければならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、貸与品等を善良な管理者の注意をもって管理しなければならない。</u></p> <p><u>4 受注者は、<u>仕様書</u>に定めるところにより、<u>作業</u>の完了、<u>仕様書</u>の変更等によって不用となった貸与品等を発注者に返還しなければならない。</u></p>	<p><u>(貸与品等)</u> <u>第 16 条 発注者が受注者に貸与し、又は支給する調査機械器具、図面その他業務等に必要な物品等（以下「貸与品等」という。）の品名、数量、品質、規格又は性能、引渡場所及び引渡時期は、<u>設計図書</u>に定めるところによる。</u></p> <p><u>2 受注者は、貸与品等の引渡しを受けたときは、引渡しの日から 7 日以内に、発注者に<u>受領書</u>又は<u>借用書</u>を提出しなければならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、貸与品等を善良な管理者の注意をもって管理しなければならない。</u></p> <p><u>4 受注者は、<u>設計図書</u>に定めるところにより、<u>業務等</u>の完了、<u>設計図書</u>の変更等によって不用となった貸与品等を発注者に返還しなければならない。</u></p>

改正前	改正後
<p>5 受注者は、故意又は過失により貸与品等が滅失若しくは破損し、又はその返還が不可能となったときは、発注者の指定した期間内に代品を納め、若しくは原状に復して返還し、又は返還に代えて損害を賠償しなければならない。</p>	<p>5 受注者は、故意又は過失により貸与品等が滅失若しくは破損し、又はその返還が不可能となったときは、発注者の指定した期間内に代品を納め、若しくは原状に復して返還し、又は返還に代えて損害を賠償しなければならない。</p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(設計図書と業務等内容が一致しない場合の修補義務)</u> <u>第 17 条 受注者は、業務等の内容が設計図書又は発注者の指示若しくは発注者と受注者との協議の内容に適合しない場合において、監督職員がその修補を請求したときは、当該請求に従わなければならない。この場合において、当該不適合が発注者の指示によるときその他発注者の責めに帰すべき事由によるときは、発注者は、必要があると認められるときは、履行期間若しくは業務委託料を変更し、又は受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(条件変更等)</u> <u>第 18 条 受注者は、業務等を行うに当たり、次の各号のいずれかに該当する事実を発見したときは、その旨を直ちに発注者に通知し、その確認を請求しなければならない。</u> <u>(1) 図面、仕様書、現場説明書及び現場説明に対する質問回答書が一致しないこと（これらの優先順位が定められている場合を除く。）。</u> <u>(2) 設計図書に誤謬又は脱漏があること。</u> <u>(3) 設計図書の表示が明確でないこと。</u> <u>(4) 履行上の制約等設計図書に示された自然的又は人為的な履行条件が実際と相違すること。</u> <u>(5) 設計図書に明示されていない履行条件について予期することのできない特別な状態が生じたこと。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>2 発注者は、前項の規定による確認を請求されたとき又は自ら同項各号に掲げる事実を発見したときは、受注者の立会いの上、直ちに調査を行わなければならない。ただし、受注者が立会いに応じない場合には、受注者の立会いを得ずに行うことができる。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>3 発注者は、受注者の意見を聴いて、調査の結果（これに対してとるべき措置を指示する必要があるときは、当該指示を含む。）をとりまとめ、調査の終了後 14 日以内に、その結果を受注者に通知しなければならない。ただし、その期間内に通知できないやむを得ない理由があるときは、あらかじめ、受注者の意見を聴いた上、当該期間を延長することができる。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>4 前項の調査の結果により第 1 項各号に掲げる事実が確認された場合において、必要があると認められるときは、発注者は、設計図書の訂正又は変更を行わなければならない。</u></p>

改正前	改正後
<p><u>(作業内容の変更等)</u> <u>第9条</u> <u>2 前項の場合において、受注者が損害を受けたときは、発注者はその損害を賠償しなければならない。賠償額は、発注者と受注者とが協議してこれを定めるものとする。</u></p>	<p><u>5 前項の規定により設計図書の訂正又は変更が行われた場合において、発注者は、必要があると認められるときは、履行期間若しくは業務委託料を変更し、又は受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(作業内容の変更等)</u> <u>第9条 発注者は、必要がある場合には、作業の内容を変更し、又は一時中止し、若しくは打ち切ることができる。この場合において期間又は請負代金額を変更する必要があるときは、発注者と受注者とが協議して書面によりこれを定めるものとする。</u></p>	<p><u>(設計図書等の変更)</u> <u>第19条 発注者は、前条第4項の規定によるほか、必要があると認めるときは、設計図書又は業務等に関する指示（以下この条及び第21条において「設計図書等」という。）の変更内容を受注者に通知して、設計図書等を変更することができる。この場合において、発注者は、必要があると認められるときは履行期間若しくは業務委託料を変更し、又は受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(作業内容の変更等)</u> <u>第9条 発注者は、必要がある場合には、作業の内容を変更し、又は一時中止し、若しくは打ち切ることができる。この場合において期間又は請負代金額を変更する必要があるときは、発注者と受注者とが協議して書面によりこれを定めるものとする。</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(業務等の中止)</u> <u>第20条 第三者の所有する土地への立ち入りについて当該土地の所有者等の承諾を得ることができないため又は暴風、豪雨、洪水、高潮、地震、地すべり、落盤、火災、騒乱、暴動その他の自然的又は人為的な事象（以下「天災等」という。）であって、受注者の責めに帰すことができないものにより作業現場の状態が著しく変動したため、受注者が業務等を行うことができないと認められるときは、発注者は、業務等の中止内容を直ちに受注者に通知して、業務等の全部又は一部を一時中止させなければならない。</u></p> <p><u>2 発注者は、前項の規定によるほか、必要があると認めるときは、業務等の中止内容を受注者に通知して、業務等の全部又は一部を一時中止させることができる。</u></p> <p><u>3 発注者は、前2項の規定により業務等を一時中止した場合において、必要があると認められるときは履行期間若しくは業務委託料を変更し、又は受注者が業務等の続行に備え業務等の一時中止に伴う増加費用を必要としたとき若しくは受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(業務等に係る受注者の提案)</u> <u>第21条 受注者は、設計図書等について、技術的又は経済的に優れた代替方法その他改良事項を発見し、又は発案したときは、発注者に対して、当該発見又は発案に基づき設計図書等の変更を提案することができる。</u></p> <p><u>2 発注者は、前項に規定する受注者の提案を受けた場合において、必要があると認めるときは、設計図書等の変更を受注者に通知するものとする。</u></p>

改正前	改正後
(新設)	3 発注者は、前項の規定により設計図書等が変更された場合において、必要があると認められるときは、 <u>履行期間又は業務委託料を変更しなければならない。</u>
(新設)	<u>(適正な履行期間の設定)</u> 第 22 条 発注者は、 <u>履行期間の延長又は短縮を行うときは、この業務等に従事する者の労働時間その他の労働条件が適正に確保されるよう、やむを得ない事由により業務等の実施が困難であると見込まれる日数等を考慮しなければならない。</u>
<u>(追加) 履行期間の延長</u> 第 10 条 受注者は、その責めによらない事由により、 <u>(追加) 期間内に作業を完了することができないことが明らかになったときは、発注者に対して遅滞なくその事由を付して期間の延長を求めることができる。その延長日数は発注者と受注者とが協議してこれを定めるものとする。</u> 2 <u>(追加) 発注者は、その履行期間の延長が発注者の責めに帰すべき事由による場合においては、業務委託料について必要と認められる変更を行い、又は受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u>	<u>(受注者の請求による履行期間の延長)</u> 第 23 条 受注者は、その責めに帰すことができない事由により <u>(削除) 履行期間内に業務等を完了することができない (削除) ときは、その理由を明示した書面により発注者に履行期間の延長変更を請求することができる。</u> 2 <u>発注者は、前項の規定による請求があった場合において、必要があると認められるときは、履行期間を延長しなければならない。</u> 発注者は、その履行期間の延長が発注者の責めに帰すべき事由による場合においては、業務委託料について必要と認められる変更を行い、又は受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。
(新設)	<u>(発注者の請求による履行期間の短縮)</u> 第 24 条 発注者は、 <u>特別の理由により履行期間を短縮する必要があるときは、履行期間の短縮変更を受注者に請求することができる。</u> 2 <u>発注者は、前項の場合において、必要があると認められるときは、業務委託料を変更し、又は受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u>
(新設)	<u>(履行期間の変更方法)</u> 第 25 条 <u>履行期間の変更については、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から 14 日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</u>

改正前	改正後
	<p><u>2 前項の協議開始の日については、発注者が受注者の意見を聴いて定め、受注者に通知するものとする。ただし、発注者が履行期間の変更事由が生じた日（第 23 条の場合にあっては発注者が履行期間の変更の請求を受けた日、前条の場合にあっては受注者が履行期間の変更の請求を受けた日）から 7 日以内に協議開始の日を通知しない場合には、受注者は、協議開始の日を定め、発注者に通知することができる。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(業務委託料の変更方法等)</u> <u>第 26 条 業務委託料の変更については、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から 14 日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</u></p> <p><u>2 前項の協議開始の日については、発注者が受注者の意見を聴いて定め、受注者に通知するものとする。ただし、発注者が業務委託料の変更事由が生じた日から 7 日以内に協議開始の日を通知しない場合には、受注者は、協議開始の日を定め、発注者に通知することができる。</u></p> <p><u>3 この契約書の規定により、受注者が増加費用を必要とした場合又は損害を受けた場合に発注者が負担する必要な費用の額については、発注者と受注者とが協議して定める。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(臨機の措置)</u> <u>第 27 条 受注者は、災害防止等のため必要があると認めるときは、臨機の措置をとらなければならない。この場合において、必要があると認めるときは、受注者は、あらかじめ、発注者の意見を聴かななければならない。ただし、緊急やむを得ない事情があるときは、この限りでない。</u></p> <p><u>2 前項の場合においては、受注者は、そのとった措置の内容を発注者に直ちに通知しなければならない。</u></p> <p><u>3 発注者は、災害防止その他業務等を行う上で特に必要があると認めるときは、受注者に対して臨機の措置をとることを請求することができる。</u></p> <p><u>4 受注者が第 1 項又は前項の規定により臨機の措置をとった場合において、当該措置に要した費用のうち、受注者が業務委託料の範囲において負担することが適当でないとは認められる部分については、発注者がこれを負担する。</u></p>

改正前	改正後
<p><u>(損害のために必要を生じた経費)</u> <u>第 11 条 作業の履行に関し発生した損害（第三者に及ぼした損害を含む。）のために必要を生じた経費は、受注者が負担するものとする。ただし、その損害が発注者の責めに帰する事由による場合においては、発注者が負担するものとし、その額は発注者と受注者とが協議してこれを定めるものとする。</u></p>	<p><u>(一般的損害)</u> <u>第 28 条 成果物の引渡し前に、成果物に生じた損害その他業務等を行うにつき生じた損害（次条第 1 項、第 2 項若しくは第 3 項又は第 30 条第 1 項に規定する損害を除く。）については、受注者がその費用を負担する。ただし、その損害（設計図書に定めるところにより付された保険によりてん補された部分を除く。）のうち発注者の責めに帰すべき事由により生じたものについては、発注者が負担する。</u></p>
<p><u>(損害のために必要を生じた経費)</u> <u>第 11 条 作業の履行に関し発生した損害（第三者に及ぼした損害を含む。）のために必要を生じた経費は、受注者が負担するものとする。ただし、その損害が発注者の責めに帰する事由による場合においては、発注者が負担するものとし、その額は発注者と受注者とが協議してこれを定めるものとする。</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(第三者に及ぼした損害)</u> <u>第 29 条 業務等を行うにつき第三者に及ぼした損害（第 3 項に規定する損害を除く。）について、当該第三者に対して損害の賠償を行わなければならないときは、受注者がその賠償額を負担する。</u></p> <p><u>2 前項の規定にかかわらず、同項に規定する賠償額（設計図書に定めるところにより付された保険によりてん補された部分を除く。）のうち、発注者の指示、貸与品等の性状その他発注者の責めに帰すべき事由により生じたものについては、発注者がその賠償額を負担する。ただし、受注者が、発注者の指示又は貸与品等が不相当であること等発注者の責めに帰すべき事由があることを知りながらこれを通知しなかったときは、この限りでない。</u></p> <p><u>3 業務等を行うにつき通常避けることができない騒音、振動、地下水の断絶等の理由により第三者に及ぼした損害（設計図書に定めるところにより付された保険によりてん補された部分を除く。）について、当該第三者に損害の賠償を行わなければならないときは、発注者がその賠償額を負担しなければならない。ただし、業務等を行うにつき受注者が善良な管理者の注意義務を怠ったことにより生じたものについては、受注者が負担する。</u></p> <p><u>4 前 3 項の場合その他業務等を行うにつき第三者との間に紛争を生じた場合においては、発注者及び受注者は協力してその処理解決に当たるものとする。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(不可抗力による損害)</u> <u>第 30 条 成果物の引渡し前に、天災等（設計図書で基準を定めたものにあつては、当該基準を超えるものに限る。）で発注者と受注者のいずれの責めにも帰すことができないもの（以下この条において「不可抗力」という。）により、試験等に供される業務等の出来形部分（以下この条及び第 51 条において「業務等の出来形部分」という。）、仮設物又は作業現場に搬入済みの調査機械器具に損害が生じたときは、受注者は、その事実の発生後直ちにその状況を発注者に通知しなければならない。</u></p>

改正前	改正後
	<p><u>2 発注者は、前項の規定による通知を受けたときは、直ちに調査を行い、同項の損害（受注者が善良な管理者の注意義務を怠ったことに基づくもの及び設計図書に定めるところにより付された保険によりてん補された部分を除く。以下この条において「損害」という。）の状況を確認し、その結果を受注者に通知しなければならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、前項の規定により損害の状況が確認されたときは、損害による費用の負担を発注者に請求することができる。</u></p> <p><u>4 発注者は、前項の規定により受注者から損害による費用の負担の請求があったときは、当該損害の額（業務等の出来形部分、仮設物又は作業現場に搬入済みの調査機械器具であって立会いその他受注者の業務等に関する記録等により確認することができるものに係る額に限る。）及び当該損害の取片付けに要する費用の額の合計額（第6項において「損害合計額」という。）のうち、業務委託料の100分の1を超える額を負担しなければならない。</u></p> <p><u>5 損害の額は、次に掲げる損害につき、それぞれ当該各号に定めるところにより、算定する。</u></p> <p><u>（1）業務等の出来形部分に関する損害</u> <u>損害を受けた業務等の出来形部分に相応する業務委託料の額とし、残存価値がある場合にはその評価額を差し引いた額とする。</u></p> <p><u>（2）仮設物又は調査機械器具に関する損害</u> <u>損害を受けた仮設物又は調査機械器具で通常妥当と認められるものについて、当該業務等で償却することとしている償却費の額から損害を受けた時点における成果物に相応する償却費の額を差し引いた額とする。ただし、修繕によりその機能を回復することができ、かつ、修繕費の額が上記の額より少額であるものについては、その修繕費の額とする。</u></p> <p><u>6 数次にわたる不可抗力により損害合計額が累積した場合における第2次以降の不可抗力による損害合計額の負担については、第4項中「当該損害の額」とあるのは「損害の額の累計」と、「当該損害の取片付けに要する費用の額」とあるのは「損害の取片付けに要する費用の額の累計」と、「業務委託料の100分の1を超える額」とあるのは「業務委託料の100分の1を超える額から既に負担した額を差し引いた額」として同項を適用する。</u></p>

改正前	改正後
<p>(新設)</p>	<p><u>(業務委託料の変更にて設計図書の変更)</u> <u>第31条 発注者は、第8条、第17条から第21条まで、第23条、第24条、第27条、第28条、前条、第34条又は第41条の規定により業務委託料を増額すべき場合又は費用を負担すべき場合において、特別の理由があるときは、業務委託料の増額又は負担額の全部又は一部に代えて設計図書を変更することができる。この場合において、設計図書の変更内容は、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から14日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</u></p> <p><u>2 前項の協議開始の日については、発注者が受注者の意見を聴いて定め、受注者に通知しなければならない。ただし、発注者が同項の業務委託料を増額すべき事由又は費用を負担すべき事由が生じた日から7日以内に協議開始の日を通知しない場合には、受注者は、協議開始の日を定め、発注者に通知することができる。</u></p>
<p>(検査及び引渡し) <u>第12条 受注者は、作業を完了したときは、遅滞なく作業完了届を提出しなければならない。</u></p> <p><u>2 発注者（追加）は、受注者から前項の作業完了届を受領したときは、その日から10日以内に成果物について、発注者又は発注者が検査を行う者として定めた職員（以下「検査職員」という。）により検査を行わなければならない。</u></p> <p><u>4 受注者は、検査合格の通知を受けたときは、遅滞なく当該成果物を発注者に引渡すものとする。</u></p> <p>(新設)</p> <p><u>3 (追加) 前項の検査に合格しないときは、受注者は遅滞なく補正を行い再検査を受けなければならない。この場合、再検査の期日については同項を準用する。</u></p>	<p>(検査及び引渡し) <u>第32条 受注者は、業務等を完了したときは、その旨を発注者に通知しなければならない。</u></p> <p><u>2 発注者又は発注者が検査を行う者として定めた職員（以下「検査職員」という。）は、前項の規定による通知を受けたときは、通知を受けた日から10日以内に受注者の立会いの上、設計図書に定めるところにより、業務等の完了を確認するための検査を完了し、当該検査の結果を受注者に通知しなければならない。</u></p> <p><u>3 発注者は、前項の検査によって業務等の完了を確認した後、受注者が成果物の引渡しを申し出たときは、直ちに当該成果物の引渡しを受けなければならない。</u></p> <p><u>4 発注者は、受注者が前項の申出を行わないときは、当該成果物の引渡しを業務委託料の支払いの完了と同時にを行うことを請求することができる。この場合においては、受注者は、当該請求に直ちに応じなければならない。</u></p> <p><u>5 受注者は、業務等が第2項の検査に合格しないときは、直ちに修補して発注者又は検査職員の検査を受けなければならない。この場合においては、修補の完了を業務等の完了とみなして前各項の規定を準用する。</u></p>
<p>(請負代金の支払い) <u>第13条 受注者は、前条第4項の規定により引き渡したときは、所定の手続きに従って請負代金の支払いを請求するものとする。</u></p>	<p>(業務委託料の支払い) <u>第33条 受注者は、前条第2項の検査に合格したときは、業務委託料の支払いを請求することができる。</u></p>

改正前	改正後
<p><u>2 発注者は、前項の支払請求を受理したときは、その日から 30 日以内に支払わなければならない。</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>2 発注者は、前項の規定による請求があったときは、請求を受けた日から 30 日以内に業務委託料を支払わなければならない。</u></p> <p><u>3 発注者がその責めに帰すべき事由により前条第 2 項の期間内に検査をしないときは、その期限を経過した日から検査をした日までの期間の日数は、前項の期間（以下この項において「約定期間」という。）の日数から差し引くものとする。この場合において、その遅延日数が約定期間の日数を超えるときは、約定期間は、遅延日数が約定期間の日数を超えた日において満了したものとみなす。</u></p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(引渡し前における成果物の使用)</u> <u>第 34 条 発注者は、第 32 条第 3 項若しくは第 4 項又は第 39 条第 1 項若しくは第 2 項の規定による引渡し前においても、成果物の全部又は一部を受注者の承諾を得て使用することができる。</u></p> <p><u>2 前項の場合においては、発注者は、その使用部分を善良な管理者の注意をもって使用しなければならない。</u></p> <p><u>3 発注者は、第 1 項の規定により成果物の全部又は一部を使用したことによって受注者に損害を及ぼしたときは、必要な費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(前払金)</u> <u>第 14 条 受注者は、公共工事の前払金保証事業に関する法律（昭和 27 年法律第 184 号）第 2 条第 4 項に規定する保証事業会社と、契約書記載の履行期限を保証期限とし、同条第 5 項に規定する前払金の保証に関する契約（以下「前払金の保証契約」という。）を締結したときは、その保証証書（以下「証書」という。）を発注者に寄託して、その証書記載の保証金額の範囲内において請負代金額の 10 分の 3 を超えない額の前払金を請求することができる。</u></p> <p><u>2 前項の前払金の支払いの時期は、発注者が受注者より支払請求を受理した日から 14 日以内とする。</u></p> <p><u>(前払金の変更等)</u> <u>第 15 条 作業内容の変更その他の理由により、著しく請負代金額を増額した場合において、前払金の保証金額を増額したときは、受注者はその証書を発注者に寄託して、前条第 1 項の規定に準じてその増額後の請負代金額の 10 分の 3 の額から受領済の前払金額を差し引いた額以内の前払金を請求することができる。同条第 2 項の規定はこの場合について準用する。</u></p>	<p><u>(前金払)</u> <u>第 35 条 受注者は、(削除)保証事業会社と、契約書記載の業務等完了の時期を保証期限とする公共工事の前払金保証事業に関する法律第 2 条第 5 項に規定する保証契約（以下「保証契約」という。）を締結し、その保証証書（削除）を発注者に寄託して、(削除)業務委託料の 10 分の 3 以内の前払金の支払いを発注者に請求することができる。</u></p> <p><u>2 発注者は、前項の規定による請求があったときは、請求を受けた日から 14 日以内に前払金を支払わなければならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、業務委託料が著しく増額された場合においては、その増額後の業務委託料の 10 分の 3 から受領済みの前払金額を差し引いた額に相当する額の範囲内で前払金の支払いを請求することができる。この場合においては、前項の規定を準用する。</u></p>

改正前	改正後
<p><u>2 作業内容の変更その他の理由により、請負代金額を減額した場合において、前払金支払額が減額後の請負代金額の10分の4を超えるときは、受注者はその超過額を返還しなければならない。返還の時期は、請負代金額を減額した日から30日以内とする。ただし、本項の期間内に第17条の2の規定による支払いをしようとするときは、発注者は、その支払額の中からその超過額を控除することができる。</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>4 受注者は、業務委託料が著しく減額された場合において、受領済みの前払金額が減額後の業務委託料の10分の4を超えるときは、受注者は、業務委託料が減額された日から30日以内に、その超過額を返還しなければならない。ただし、この項の期間内に第38条又は第39条の規定による支払いをしようとするときは、発注者は、その支払額の中からその超過額を控除することができる。</u></p> <p><u>5 前項の超過額が相当の額に達し、返還することが前払金の使用状況からみて、著しく不相当であると認められるときは、発注者と受注者とが協議して返還すべき超過額を定める。ただし、業務委託料が減額された日から14日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</u></p> <p><u>6 発注者は、受注者が第4項の期間内に超過額を返還しなかったときは、その未返還額につき、同項の期間を経過した日から返還をする日までの期間について、その日数に応じ、年10.75パーセントの割合で計算した額の遅延利息の支払いを請求することができる。</u></p>
<p><u>(前払金の変更等)</u></p> <p><u>第15条 作業内容の変更その他の理由により、著しく請負代金額を増額した場合において、前払金の保証金額を増額したときは、受注者はその証書を発注者に寄託して、前条第1項の規定に準じてその増額後の請負代金額の10分の3の額から受領済の前払金額を差し引いた額以内の前払金を請求することができる。同条第2項の規定はこの場合について準用する。</u></p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>3 作業内容の変更その他の理由により、履行期限を延長し、又は短縮した場合においては、受注者は、直ちに前払金の保証契約の保証期限を延長し又は短縮した履行期限までに変更し、その証書を発注者に寄託しなければならない。</u></p>	<p><u>(保証契約の変更)</u></p> <p><u>第36条 受注者は、前条第3項の規定により受領済みの前払金に追加してさらに前払金の支払いを請求する場合には、あらかじめ、保証契約を変更し、変更後の保証証書を発注者に寄託しなければならない。</u></p> <p><u>2 受注者は、前項に定める場合のほか、業務委託料が減額された場合において、保証契約を変更したときは、変更後の保証証書を直ちに発注者に寄託しなければならない。</u></p> <p><u>3 受注者は、前払金額の変更を伴わない履行期間の変更が行われた場合には、発注者に代わりその旨を保証事業会社に直ちに通知するものとする。</u></p>
<p><u>(前払金の使用等)</u></p> <p><u>第16条 受注者は、前払金を契約書記載の<u>作業</u>（第2項にかかげる測量<u>作業</u>を除く。）の材料費、労務費、外注費、機械購入費（<u>当該業務（追加）</u>において償却される割合に相当する額に限る。）、動力費、支払運賃及び保証料（<u>追加</u>）として必要な経費以外の支払いに充当してはならない。</u></p>	<p><u>(前払金の使用等)</u></p> <p><u>第37条 受注者は、前払金を契約書記載の<u>業務等</u>（第2項にかかげる測量<u>業務</u>を除く。）の材料費、労務費、外注費、機械購入費（<u>この業務等</u>において償却される割合に相当する額に限る。）、動力費、支払運賃及び保証料（<u>に相当する額</u>）として必要な経費以外の支払いに充当してはならない。</u></p>

改正前	改正後
<p>2 測量<u>作業</u>（公共工事の前払金保証事業に関する法律第2条第1項に規定する測量をいう。）については、当該測量（<u>追加</u>）の材料費、労務費、外注費、機械器具の賃借料、機械購入費（<u>当該業務（追加）</u>において償却される割合に相当する額に限る。）、動力費、<u>交通通信費</u>、支払運賃、修繕費及び保証料（<u>追加</u>）として必要な経費以外の支払いに充当してはならない。</p> <p>3 発注者は、受注者が前2項の規定に違反したときは、受注者に対して、発注者の指定した期間内に前払金支払額（第17条の規定による支払いをしているときは、第17条第1項に規定する支払額から第17条第5項の規定により支払った額を差し引いた額を控除した額。）を返還することを請求することができる。この場合においては、前払金支払いの日から返還の日まで、年10.75%の割合で計算した額の利息を付することができる。</p>	<p>2 測量<u>業務</u>（公共工事の前払金保証事業に関する法律第2条第1項に規定する測量をいう。）については、当該測量<u>業務</u>の材料費、労務費、外注費、機械器具の賃借料、機械購入費（<u>この業務等</u>において償却される割合に相当する額に限る。）、動力費、（<u>削除</u>）支払運賃、修繕費及び保証料<u>に相当する額</u>として必要な経費以外の支払いに充当してはならない。</p> <p>（<u>削除</u>）</p>
<p>（部分払） 第17条 受注者は、作業完了前に、出来形部分に対する請負代金額相当額の10分の9以内の部分払を請求することができる。但し、この請求は、<u> 回</u>を超えることができない。</p> <p>2 受注者は、<u>前項</u>の請求をしようとするときは、<u>予め発注者に対して出来形部分の検査</u>の請求をしなければならない。</p> <p>3 発注者は、<u>前項</u>の請求があったときは、<u>遅滞なく検査職員により検査を行い、検査の結果を受注者に通知しなければならない。</u></p> <p>（<u>新設</u>）</p> <p>5 <u>前払金の支払いを受けている場合においては、第1項の規定にかかわらず、同項の規定により部分払を請求することができる額は、次の式により算定するものとする。</u></p> <p style="text-align: center;"><u>請求額 = 第1項の請負代金相当額 × (9/10 - 前払金額 / 請負代金額)</u></p>	<p>（部分払） 第38条 受注者は、<u>業務等の完了前に、受注者が既に業務等を完了した部分（次条の規定により部分引渡しを受けている場合には、当該引渡し部分を除くものとし、以下「既履行部分」という。）に相応する業務委託料相当額の10分の9以内の額について、次項から第7項までに定めるところにより部分払を請求することができる。ただし、この請求は、履行期間中 3回を超えることができない。</u></p> <p>2 受注者は、<u>部分払を請求しようとするときは、あらかじめ、当該請求に係る既履行部分の確認を発注者に請求しなければならない。</u></p> <p>3 発注者は、<u>前項の場合において、当該請求を受けた日から10日以内に、受注者の立会いの上、設計図書に定めるところにより、同項の確認をするための検査を行い、当該確認の結果を受注者に通知しなければならない。</u></p> <p>4 <u>前項の場合において、検査に直接要する費用は、受注者の負担とする。</u></p> <p>5 <u>部分払金の額は、次の式により算定する。この場合において、第1項の業務委託料相当額は、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、発注者が第3項の通知にあわせて第1項の業務委託料相当額の協議を申し出た日から10日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</u> <u>部分払金の額 ≤ 第1項の業務委託料相当額 × (9/10 - 前払金額 / 業務委託料)</u></p>

改正前	改正後
<p><u>4 部分払金の支払いの時期は、前項の検査に合格した部分に対する、受注者からの請求書を受理した日から、14日以内とするものとする。</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>6 受注者は、第3項の規定による確認があったときは、前項の規定により算定された額の部分払を請求することができる。この場合においては、発注者は、当該請求を受けた日から14日以内に部分払金を支払わなければならない。</u></p> <p><u>7 前項の規定により部分払金の支払いがあった後、再度部分払の請求をする場合においては、第1項及び第5項中「業務委託料相当額」とあるのは「業務委託料相当額から既に部分払の対象となった業務委託料相当額を控除した額」とするものとする。</u></p>
<p>(部分引渡し)</p> <p><u>第17条の2</u> 成果物について、発注者が設計図書において<u>作業</u>の完了に先だつて引渡しを受けるべきことを指定した部分（以下<u>この条において</u>「指定部分」という。）がある場合において、当該指定部分の<u>作業</u>が完了したとき（<u>追加</u>）は、第12条中「<u>作業</u>」とあるのは「指定部分に係る<u>作業</u>」と、「成果物」とあるのは「指定部分に係る成果物」と、<u>第13条</u>中「<u>請負代金</u>」とあるのは「部分引渡しに係る<u>請負代金</u>」と読み替えて、これらの規定を準用する。</p> <p><u>2</u> 前項に規定する場合のほか、成果物の一部分が完了し、かつ、可分なものであるときは、発注者は、当該部分について、受注者の承諾を得て引渡しを受けることができる。この場合において、<u>第12条</u>中「<u>作業</u>」とあるのは「引渡部分に係る<u>作業</u>」と、「成果物」とあるのは「引渡部分に係る成果物」と、<u>第13条</u>中「<u>請負代金</u>」とあるのは「部分引渡しに係る<u>請負代金</u>」と読み替えて、これらの規定を準用する。</p> <p><u>3</u> 前2項の規定により準用する<u>第13条</u>第1項の規定により受注者が請求することができる部分引渡しに係る<u>請負代金</u>は、次の各号に掲げる式により算定する。この場合において、第1号中「指定部分に相応する<u>請負代金</u>」及び第2号中「引渡部分に相応する<u>請負代金</u>」は、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、発注者が<u>前2項</u>において準用する<u>第13条</u>第1項の規定による請求を受けた日から14日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</p> <p><u>(1)</u> 第1項に規定する部分引渡しに係る<u>請負代金</u> 指定部分に相応する<u>請負代金</u>×(1-前払金の額/請負代金)</p> <p><u>(2)</u> 第2項に規定する部分引渡しに係る<u>請負代金</u> 引渡部分に相応する<u>請負代金</u>×(1-前払金の額/請負代金)</p>	<p>(部分引渡し)</p> <p><u>第39条</u> 成果物について、発注者が設計図書において<u>業務等</u>の完了に先だつて引渡しを受けるべきことを指定した部分（以下<u>(削除)</u>「指定部分」という。）がある場合において、当該指定部分の<u>業務等</u>が完了したとき<u>について</u>は、<u>第32条</u>中「<u>業務等</u>」とあるのは「指定部分に係る<u>業務等</u>」と、「成果物」とあるのは「指定部分に係る成果物」と、<u>同条第4項及び第33条</u>中「<u>業務委託料</u>」とあるのは「部分引渡しに係る<u>業務委託料</u>」と読み替えて、これらの規定を準用する。</p> <p><u>2</u> 前項に規定する場合のほか、成果物の一部分が完了し、かつ、可分なものであるときは、発注者は、当該部分について、受注者の承諾を得て引渡しを受けることができる。この場合において、<u>第32条</u>中「<u>業務等</u>」とあるのは「引渡部分に係る<u>業務等</u>」と、「成果物」とあるのは「引渡部分に係る成果物」と、<u>同条第4項及び第33条</u>中「<u>業務委託料</u>」とあるのは「部分引渡しに係る<u>業務委託料</u>」と読み替えて、これらの規定を準用する。</p> <p><u>3</u> 前2項の規定により準用<u>される</u><u>第33条</u>第1項の規定により受注者が請求することができる部分引渡しに係る<u>業務委託料</u>は、次の各号に掲げる式により算定する。この場合において、第1号中「指定部分に相応する<u>業務委託料</u>」及び第2号中「引渡部分に相応する<u>業務委託料</u>」は、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、発注者が<u>(削除)</u><u>前2項</u>において準用する<u>第33条</u>第1項の規定による請求を受けた日から14日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</p> <p><u>(1)</u> 第1項に規定する部分引渡しに係る<u>業務委託料</u> 指定部分に相応する<u>業務委託料</u>×(1-前払金の額/業務委託料)</p> <p><u>(2)</u> 第2項に規定する部分引渡しに係る<u>業務委託料</u> 引渡部分に相応する<u>業務委託料</u>×(1-前払金の額/業務委託料)</p>

改正前	改正後												
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(債務負担行為に係る契約の特則)</u> <u>第 39 条の 2 債務負担行為に係る契約において、各会計年度における業務委託料の支払いの限度額（以下「支払限度額」という。）は、次のとおりとする。</u></p> <table border="0" style="margin-left: 40px;"> <tr><td>年度</td><td>円</td></tr> <tr><td>年度</td><td>円</td></tr> <tr><td>年度</td><td>円</td></tr> </table> <p><u>2 支払限度額に対応する各会計年度の履行高予定額は、次のとおりである。</u></p> <table border="0" style="margin-left: 40px;"> <tr><td>年度</td><td>円</td></tr> <tr><td>年度</td><td>円</td></tr> <tr><td>年度</td><td>円</td></tr> </table> <p><u>3 発注者は、予算上の都合その他の必要があるときは、第 1 項の支払限度額及び前項の履行高予定額を変更することができる。</u></p>	年度	円	年度	円	年度	円	年度	円	年度	円	年度	円
年度	円												
年度	円												
年度	円												
年度	円												
年度	円												
年度	円												
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(債務負担行為に係る契約の前金払の特則)</u> <u>第 39 条の 3 債務負担行為に係る契約の前金払については、第 35 条中「契約書記載の業務等完了の時期」とあるのは「契約書記載の業務等完了の時期（最終の会計年度以外の会計年度にあつては、各会計年度末）」と、同条及び第 36 条中「業務委託料」とあるのは「当該会計年度の履行高予定額（前会計年度末における第 38 条第 1 項の業務委託料相当額（以下この条及び次条において「前会計年度末業務委託料相当額」という。）が前会計年度までの履行高予定額を超えた場合において、当該会計年度の当初に部分払をしたときは、当該超過額を控除した額）」とする。ただし、この契約を締結した会計年度（以下「契約会計年度」という。）以外の会計年度においては、受注者は、予算の執行が可能となる時期以前に前払金の支払いを請求することはできない。</u></p> <p><u>2 前項の場合において、契約会計年度について前払金を支払わない旨が設計図書に定められているときには、同項の規定による読替え後の第 35 条第 1 項の規定にかかわらず、受注者は、契約会計年度について前払金の支払いを請求することができない。</u></p> <p><u>3 第 1 項の場合において、契約会計年度に翌会計年度分の前払金を含めて支払う旨が設計図書に定められているときには、同項の規定による読替え後の第 35 条第 1 項の規定にかかわらず、受注者は、契約会計年度に翌会計年度に支払うべき前払金相当分（ 円以内）を含めて前払金の支払いを請求することができる。</u></p>												

改正前	改正後						
	<p><u>4 第1項の場合において、前会計年度末業務委託料相当額が前会計年度までの履行高予定額に達しないときには、同項の規定による読替え後の第35条第1項の規定にかかわらず、受注者は、業務委託料相当額が前会計年度までの履行高予定額に達するまで当該会計年度の前払金の支払いを請求することができない。</u></p> <p><u>5 第1項の場合において、前会計年度末業務委託料相当額が前会計年度までの履行高予定額に達しないときには、その額が当該履行高予定額に達するまで前払金の保証期限を延長するものとする。この場合においては、第36条第3項の規定を準用する。</u></p>						
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(債務負担行為に係る契約の部分払の特則)</u></p> <p><u>第39条の4 債務負担行為に係る契約において、前会計年度末業務委託料相当額が前会計年度までの履行高予定額を超えた場合においては、受注者は、当該会計年度の当初に当該超過額（以下「履行高超過額」という。）について部分払を請求することができる。ただし、契約会計年度以外の会計年度においては、受注者は、予算の執行が可能となる時期以前に部分払の支払いを請求することはできない。</u></p> <p><u>2 この契約において、前払金の支払いを受けている場合の部分払金の額については、第38条第5項及び第7項の規定にかかわらず、次の式により算定する。</u></p> <p><u>部分払金の額 ≤ 業務委託料相当額 × 9 / 10 - (前会計年度までの支払金額 + 当該会計年度の部分払金額) - {業務委託料相当額 - (前会計年度までの履行高予定額 + 履行高超過額)} × 当該会計年度前払金額 / 当該会計年度の履行高予定額</u></p> <p><u>3 各会計年度において、部分払を請求できる回数は、次のとおりとする。</u></p> <table border="1" data-bbox="1299 1053 1478 1165"> <tr> <td>年度</td> <td>回</td> </tr> <tr> <td>年度</td> <td>回</td> </tr> <tr> <td>年度</td> <td>回</td> </tr> </table>	年度	回	年度	回	年度	回
年度	回						
年度	回						
年度	回						
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(第三者による代理受領)</u></p> <p><u>第40条 受注者は、発注者の承諾を得て業務委託料の全部又は一部の受領につき、第三者を代理人とすることができる。</u></p> <p><u>2 発注者は、前項の規定により受注者が第三者を代理人とした場合において、受注者の提出する支払請求書に当該第三者が受注者の代理人である旨の明記がなされているときは、当該第三者に対して第33条（第39条において準用する場合を含む。）又は第38条の規定に基づく支払いをしなければならない。</u></p>						

改正前	改正後
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(前払金等の不払に対する業務等中止)</u> <u>第 41 条 受注者は、発注者が第 35 条、第 38 条又は第 39 条において準用される第 33 条の規定に基づく支払いを遅延し、相当の期間を定めてその支払いを請求したにもかかわらず支払いをしないときは、業務等の全部又は一部を一時中止することができる。この場合においては、受注者は、その理由を明示した書面により、直ちにその旨を発注者に通知しなければならない。</u></p> <p><u>2 発注者は、前項の規定により受注者が業務等を一時中止した場合において、必要があると認められるときは履行期間若しくは業務委託料を変更し、又は受注者が増加費用を必要とし、若しくは受注者に損害を及ぼしたときは必要な費用を負担しなければならない。</u></p>
<p><u>(履行遅滞の場合における損害金等)</u> <u>第 18 条 受注者の責めに帰する事由により、期間内に作業を完了することができない場合において、期限後に完了する見込みがあると認めるときは、発注者は、損害金を付して期間を延長することができる。</u></p> <p><u>2 前項の損害金の額は、請負代金額から第 17 条の 2 の規定による部分引渡しに係る請負代金額を控除した額につき、遅延日数により年 10.75%の割合で計算した額とする。</u></p> <p><u>3 発注者の責めに帰する事由により、第 13 条第 2 項(第 17 条の 2 において準用する場合を含む。)の請負代金の支払いが遅延した場合には、受注者は、発注者に対して、年 10.75%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。</u></p>	<p><u>(削除)</u></p>
<p><u>(契約不適合責任)</u> <u>第 19 条 発注者は、引き渡された成果物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないもの（以下「契約不適合」という。）であるときは、受注者に対し、成果物の修補又は代替物の引渡しによる履行の追完を請求することができる。</u></p> <p><u>2 前項の場合において、受注者は、発注者に不相当な負担を課するものでないときは、発注者が請求した方法と異なる方法による履行の追完をすることができる。</u></p> <p><u>3 第 1 項の場合において、発注者が相当の期間を定めて履行の追完の催告をし、その期間内に履行の追完がないときは、発注者は、その不適合の程度に応じて代金の減額を請求することができる。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合は、催告をすることなく、直ちに代金の減額を請求することができる。</u></p>	<p><u>(契約不適合責任)</u> <u>第 42 条 発注者は、引き渡された成果物が種類又は品質に関して契約の内容に適合しないもの（以下「契約不適合」という。）であるときは、受注者に対し、成果物の修補又は代替物の引渡しによる履行の追完を請求することができる。</u></p> <p><u>2 前項の場合において、受注者は、発注者に不相当な負担を課するものでないときは、発注者が請求した方法と異なる方法による履行の追完をすることができる。</u></p> <p><u>3 第 1 項の場合において、発注者が相当の期間を定めて履行の追完の催告をし、その期間内に履行の追完がないときは、発注者は、その不適合の程度に応じて代金の減額を請求することができる。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合は、催告をすることなく、直ちに代金の減額を請求することができる。</u></p>

改正前	改正後
<p>る。</p> <p><u>(1)</u> 履行の追完が不能であるとき。</p> <p><u>(2)</u> 受注者が履行の追完を拒絶する意思を明確に表示したとき。</p> <p><u>(3)</u> 成果物の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行しなければ契約をした目的を達することができない場合において、受注者が履行の追完をしないでその時期を経過したとき。</p> <p><u>(4)</u> 前3号に掲げる場合のほか、発注者がこの項の規定による催告をしても履行の追完を受ける見込みがないことが明らかであるとき。</p>	<p>る。</p> <p><u>(1)</u> 履行の追完が不能であるとき。</p> <p><u>(2)</u> 受注者が履行の追完を拒絶する意思を明確に表示したとき。</p> <p><u>(3)</u> 成果物の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行しなければ契約をした目的を達することができない場合において、受注者が履行の追完をしないでその時期を経過したとき。</p> <p><u>(4)</u> 前3号に掲げる場合のほか、発注者がこの項の規定による催告をしても履行の追完を受ける見込みがないことが明らかであるとき。</p>
<p>(発注者の任意解除権)</p> <p>第20条 発注者は、業務<u>(追加)</u>が完了するまでの間は、次条、第22条、第22条の2又は第22条の3の規定によるほか、必要があるときは、この契約を解除することができる。</p> <p>2 発注者は、前項の規定によりこの契約を解除した場合において、受注者に損害を及ぼしたときは、その損害を賠償しなければならない。</p>	<p>(発注者の任意解除権)</p> <p>第43条 発注者は、業務<u>等</u>が完了するまでの間は、次条、第45条、第45条の2又は第45条の3の規定によるほか、必要があるときは、この契約を解除することができる。</p> <p>2 発注者は、前項の規定によりこの契約を解除した場合において、受注者に損害を及ぼしたときは、その損害を賠償しなければならない。</p>
<p>(発注者の催告による解除権)</p> <p>第21条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当するときは、<u>(追加)</u>相当の期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときはこの契約を解除することができる。ただし、その期間を経過した時における債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。</p> <p><u>(1)</u> 第3条第4項に規定する書類を提出せず、又は虚偽の記載をしてこれを提出したとき。</p> <p><u>(2)</u> 正当な理由なく、業務<u>(追加)</u>に着手すべき期日を過ぎても業務<u>(追加)</u>に着手しないとき。</p> <p><u>(3)</u> 履行期間内に完了しないとき又は履行期間経過後相当の期間内に業務<u>(追加)</u>を完了する見込みがないと認められるとき。</p> <p><u>(新設)</u></p> <p><u>(4)</u> 正当な理由なく、第19条第1項の履行の追完がなされないとき。</p> <p><u>(5)</u> 前各号に掲げる場合のほか、この契約に違反したとき。</p>	<p>(発注者の催告による解除権)</p> <p>第44条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当するときは、<u>相当の</u>期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときはこの契約を解除することができる。ただし、その期間を経過した時における債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。</p> <p><u>(1)</u> 第5条第4項に規定する書類を提出せず、又は虚偽の記載をしてこれを提出したとき。</p> <p><u>(2)</u> 正当な理由なく、業務<u>等</u>に着手すべき期日を過ぎても業務<u>等</u>に着手しないとき。</p> <p><u>(3)</u> 履行期間内に完了しないとき又は履行期間経過後相当の期間内に業務<u>等</u>を完了する見込みがないと認められるとき。</p> <p><u>(4)</u> <u>主任技術者を配置しなかったとき。</u></p> <p><u>(5)</u> 正当な理由なく、第42条第1項の履行の追完がなされないとき。</p> <p><u>(6)</u> 前各号に掲げる場合のほか、この契約に違反したとき。</p>
<p>(発注者の催告によらない解除権)</p> <p>第22条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p> <p><u>(1)</u> 第3条第1項の規定に違反して業務委託料債権を譲渡したとき。</p> <p><u>(2)</u> 第3条第4項の規定に違反して譲渡により得た資金を当該業務<u>(追加)</u>の履行以外に使用したとき。</p>	<p>(発注者の催告によらない解除権)</p> <p>第45条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p> <p><u>(1)</u> 第5条第1項の規定に違反して業務委託料債権を譲渡したとき。</p> <p><u>(2)</u> 第5条第4項の規定に違反して譲渡により得た資金を当該業務<u>等</u>の履行以外に使用したとき。</p>

改正前	改正後
<p>(3) この契約の成果物を完成させることができないことが明らかであるとき。</p> <p>(4) 受注者がこの契約の成果物の完成の債務の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。</p> <p>(5) 受注者の債務の一部の履行が不能である場合又は受注者がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示した場合において、残存する部分のみでは契約をした目的を達することができないとき。</p> <p>(6) 契約の成果物の性質や当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行しなければ契約をした目的を達することができない場合において、受注者が履行をしないでその時期を経過したとき。</p> <p>(7) 前各号に掲げる場合のほか、受注者がその債務の履行をせず、発注者が前条の催告をしても契約をした目的を達するのに足りる履行がされる見込みがないことが明らかであるとき。</p> <p>(8) 暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下この条及び次条において同じ。）又は暴力団員（<u>同法</u>第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下この条及び次条において同じ。）が経営に実質的に関与していると認められる者に業務委託料債権を譲渡したとき。</p> <p>(9) 第24条又は第25条の規定によらないでこの契約の解除を申し出たとき。</p>	<p>(3) この契約の成果物を完成させることができないことが明らかであるとき。</p> <p>(4) 受注者がこの契約の成果物の完成の債務の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。</p> <p>(5) 受注者の債務の一部の履行が不能である場合又は受注者がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示した場合において、残存する部分のみでは契約をした目的を達することができないとき。</p> <p>(6) 契約の成果物の性質や当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行しなければ契約をした目的を達することができない場合において、受注者が履行をしないでその時期を経過したとき。</p> <p>(7) 前各号に掲げる場合のほか、受注者がその債務の履行をせず、発注者が前条の催告をしても契約をした目的を達するのに足りる履行がされる見込みがないことが明らかであるとき。</p> <p>(8) 暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下この条及び次条において同じ。）又は暴力団員（<u>暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律</u>第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下この条及び次条において同じ。）が経営に実質的に関与していると認められる者に業務委託料債権を譲渡したとき。</p> <p>(9) 第47条又は第48条の規定によらないでこの契約の解除を申し出たとき。</p>
<p>（暴力団排除に係る解除） 第22条の2 発注者は、受注者（受注者が<u>共同企業体</u>であるときは、その構成員のいずれかの者。以下この条において同じ。）が次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p> <p>(1) 役員等（<u>法人にあっては役員（非常勤の者を含む。）、支配人及び支店又は営業所（常時測量・調査等契約に関する業務を行う事務所をいう。以下同じ。）の代表者を、個人にあってはその者、支配人及び支店又は営業所の代表者をいう。</u>以下同じ。）が暴力団員であると認められるとき。</p> <p>(2) 暴力団又は暴力団員が経営に実質的に関与していると認められるとき。</p> <p>(3) 役員等が、<u>その属する法人、自己（追加）</u>若しくは第三者の不正な利益を図る目的で、又は第三者に損害を<u>与える</u>目的で、暴力団又は暴力団員を利用しているとき。</p> <p>(4) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して資金等を<u>提供</u>し、又は便宜を供与する等直接的<u>若しくは</u>積極的に暴力団の維持<u>及び</u>運営に協力し、<u>又は</u>関与していると認められるとき。</p> <p>(5) <u>前2号に掲げる場合のほか、</u>役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有していると認められるとき。</p>	<p>（暴力団等排除に係る解除） 第45条の2 発注者は、受注者（受注者が<u>設計共同体</u>であるときは、その構成員のいずれかの者。以下この条において同じ。）が次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p> <p>(1) 役員等（<u>受注者が個人である場合にはその者を、受注者が法人である場合にはその役員又はその支店若しくは常時測量・調査等の契約を締結する事務所の代表者をいう。</u>以下同じ。）が暴力団員であると認められるとき。</p> <p>(2) 暴力団又は暴力団員が経営に実質的に関与していると認められるとき。</p> <p>(3) 役員等が（<u>削除</u>）自己、<u>自社</u>若しくは第三者の不正の利益を図る目的（<u>削除</u>）又は第三者に損害を<u>加える</u>目的<u>をもって</u>、暴力団又は暴力団員を利用する<u>などした</u>と認められるとき。</p> <p>(4) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して資金等を<u>供給</u>し、又は便宜を供与する<u>など</u>直接的<u>あるいは</u>積極的に暴力団の維持、<u>運営</u>に協力し、<u>若しくは</u>関与していると認められるとき。</p> <p>(5) （<u>削除</u>）役員等が（<u>削除</u>）暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有していると認められるとき。</p>

改正前	改正後
<p>(6) この契約に係る下請契約又は資材及び原材料の購入契約等の契約（以下「<u>下請契約等</u>」という。）に当たって、その相手方が前各号のいずれかに該当することを知らず、当該者と契約を締結したと認められるとき。</p> <p>(7) この契約に係る下請契約等に当たって、第1号から第5号までのいずれかに該当する者をその相手方としていた場合（前号に該当する場合を除く。）において、発注者が（追加）当該下請契約等の解除を求めたにもかかわらず、それに従わなかったとき。</p> <p>(8) この契約の履行に当たって、暴力団又は暴力団員から不当に介入を受けたにもかかわらず、遅滞なくその旨を発注者に報告せず、又は警察に届け出なかったとき。</p>	<p>(6) <u>再委託契約その他の契約</u>（以下「<u>再委託契約等</u>」という。以下同じ。）に当たり、その相手方が前各号のいずれかに該当することを知らず、当該者と契約を締結したと認められるとき。</p> <p>(7) <u>受注者が</u>、第1号から第5号までのいずれかに該当する者を再委託契約等の相手方としていた場合（前号に該当する場合を除く。）に（<u>削除</u>）、発注者が<u>受注者に対して当該契約</u>の解除を求め、<u>受注者がこれに従わなかった</u>とき。</p> <p>(8) この契約の履行に当たり、暴力団又は暴力団員から不当に介入を受けたにもかかわらず、遅滞なくその旨を発注者に報告せず、又は警察に届け出なかったとき。</p>
<p>（談合等による解除）</p> <p>第22条の3 発注者は、受注者がこの契約に関し次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p> <p>(1) 公正取引委員会が受注者に対し、私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「<u>独占禁止法</u>」という。）第64条第1項の競争回復措置命令をし、その命令が確定したとき。</p> <p>(2) 公正取引委員会が受注者に対し<u>独占禁止法</u>第49条の排除措置命令をし、その命令が確定したとき。</p> <p>(3) 公正取引委員会が受注者に対し<u>独占禁止法</u>第62条第1項の納付命令をし、その命令が確定したとき。</p> <p>(4) 受注者（受注者が法人の場合にあっては、その役員又はその使用人）が、刑法（明治40年法律第45号）第96条の6又は第198条の罪を犯し、刑に処せられたとき。</p>	<p>（談合等による解除）</p> <p>第45条の3 発注者は、受注者がこの契約に関し次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p> <p>(1) 公正取引委員会が受注者に対し、私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「<u>独占禁止法</u>」という。）第64条第1項の競争回復措置命令をし、その命令が確定したとき。</p> <p>(2) 公正取引委員会が受注者に対し<u>独占禁止法</u>第49条の排除措置命令をし、その命令が確定したとき。</p> <p>(3) 公正取引委員会が受注者に対し<u>独占禁止法</u>第62条第1項の納付命令をし、その命令が確定したとき。</p> <p>(4) 受注者（受注者が法人の場合にあっては、その役員又はその使用人）が、刑法（明治40年法律第45号）第96条の6又は第198条の罪を犯し、刑に処せられたとき。</p>
<p>（発注者の責めに帰すべき事由による場合の解除の制限）</p> <p>第23条 第21条各号、第22条各号、第22条の2各号又は前条各号に定める場合が発注者の責めに帰すべき事由によるものであるときは、発注者は、前4条の規定による契約の解除をすることができない。</p>	<p>（発注者の責めに帰すべき事由による場合の解除の制限）</p> <p>第46条 第44条各号、第45条各号、第45条の2各号又は前条各号に定める場合が発注者の責めに帰すべき事由によるものであるときは、発注者は、前4条の規定による契約の解除をすることができない。</p>
<p>（受注者の催告による解除権）</p> <p>第24条 受注者は、発注者がこの契約に違反したときは、相当の期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときは、この契約を解除することができる。ただし、その期間を経過した時における債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。</p>	<p>（受注者の催告による解除権）</p> <p>第47条 受注者は、発注者がこの契約に違反したときは、相当の期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときは、この契約を解除することができる。ただし、その期間を経過した時における債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるときは、この限りでない。</p>
<p>（受注者の催告によらない解除権）</p> <p>第25条 受注者は、次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p>	<p>（受注者の催告によらない解除権）</p> <p>第48条 受注者は、次の各号のいずれかに該当するときは、直ちにこの契約を解除することができる。</p>

改正前	改正後
<p>(1) 第 9 条の規定により内容を変更したため<u>請負代金額</u>が 3 分の 2 以上減少したとき</p> <p>(2) 第 9 条の規定による <u>(追加)</u> 中止の期間が履行期間の <u>2 分の 1 以上に達したとき。</u></p>	<p>(1) 第 19 条の規定により設計図書を変更したため<u>業務委託料</u>が 3 分の 2 以上減少したとき。</p> <p>(2) 第 20 条の規定による<u>業務等</u>の中止期間が履行期間の <u>10 分の 5 (履行期間の 10 分の 5 が 6 月を超えるとときは、6 月) を超えたとき。ただし、中止が業務等の一部のみの場合は、その一部を除いた他の部分の業務等が完了した後 3 月を経過しても、なおその中止が解除されないとき。</u></p>
<p>(受注者の責めに帰すべき事由による場合の解除の制限)</p> <p>第 26 条 第 24 条又は前条各号に定める場合が受注者の責めに帰すべき事由によるものであるときは、受注者は、前 2 条の規定による契約の解除をすることができない。</p>	<p>(受注者の責めに帰すべき事由による場合の解除の制限)</p> <p>第 49 条 第 47 条又は前条各号に定める場合が受注者の責めに帰すべき事由によるものであるときは、受注者は、前 2 条の規定による契約の解除をすることができない。</p>
<p>(解除の効果)</p> <p>第 27 条 この契約が解除された場合には、第 1 条第 2 項に規定する発注者及び受注者の義務は消滅する。ただし、第 17 条の 2 に規定する部分引渡しに係る部分については、この限りでない。</p> <p>2 発注者は、前項の規定にかかわらず、この契約が業務 <u>(追加)</u> の完了前に解除された場合において、既履行部分 <u>(第 17 条の 2 の規定により部分引渡しを受けている場合には、当該引渡し部分を除くものとし、以下「既履行部分」という。)</u> の引渡しを受ける必要があると認めたときは、既履行部分を検査の上、当該検査に合格した部分の引渡しを受けることができる。この場合において、発注者は、当該引渡しを受けた既履行部分に相応する業務委託料（以下 <u>この条及び次条において「既履行部分委託料」という。</u>）を受注者に支払わなければならない。</p> <p>3 前項に規定する既履行部分委託料は、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から 14 日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</p>	<p>(解除の効果)</p> <p>第 50 条 この契約が解除された場合には、第 1 条第 2 項に規定する発注者及び受注者の義務は消滅する。ただし、第 39 条に規定する部分引渡しに係る部分については、この限りでない。</p> <p>2 発注者は、前項の規定にかかわらず、この契約が業務 <u>等</u> の完了前に解除された場合において、既履行部分 <u>(削除)</u> の引渡しを受ける必要があると認めたときは、既履行部分を検査の上、当該検査に合格した部分の引渡しを受けることができる。この場合において、発注者は、当該引渡しを受けた既履行部分に相応する <u>業務委託料</u>（以下 <u>(削除)</u> 「既履行部分 <u>委託料</u>」という。）を受注者に支払わなければならない。</p> <p>3 前項に規定する既履行部分 <u>委託料</u> は、発注者と受注者とが協議して定める。ただし、協議開始の日から 14 日以内に協議が整わない場合には、発注者が定め、受注者に通知する。</p>

改正前	改正後
<p>(解除に伴う措置)</p> <p>第 28 条 この契約が業務 <u>(追加)</u> の完了前に解除された場合において、第 14 条 <u>(追加)</u> の規定による前払金があったときは、受注者は、第 21 条、第 22 条、第 22 条の 2、第 22 条の 3 又は次条第 3 項の規定による解除にあつては、当該前払金の額 (第 17 条の規定による部分払があった場合は、その部分払において償却した前払金の額を控除した額を、第 17 条の 2 の規定による部分引渡しがあった場合は、その部分引渡しにおいて償却した前払金の額を控除した額) に当該前払金の支払いの日から返還の日までの日数に応じ年 10.75 パーセントの割合で計算した額の利息を付した額を、第 20 条、第 24 条又は第 25 条の規定による解除にあつては、当該前払金の額を発注者に返還しなければならない。</p> <p>2 前項の規定にかかわらず、この契約が業務 <u>(追加)</u> の完了前に解除され、かつ、前条第 2 項の規定により既履行部分の引渡しが行われる場合において、第 14 条 <u>(追加)</u> の規定による前払金があったときは、発注者は、当該前払金 (第 17 条の規定による部分払があった場合は、その部分払において償却した前払金の額を控除した額を、第 17 条の 2 の規定による部分引渡しがあった場合は、その部分引渡しにおいて償却した前払金の額を控除した額) を前条第 3 項の規定により定められた既履行部分委託料から控除する <u>(追加)</u>。この場合において、受領済みの前払金になお余剰があるときは、受注者は、第 21 条、第 22 条、第 22 条の 2、第 22 条の 3 又は次条第 3 項の規定による解除にあつては、当該余剰額に前払金の支払いの日から返還の日までの日数に応じ年 10.75 パーセントの割合で計算した額の利息を付した額を、第 20 条、第 24 条又は第 25 条の規定による解除にあつては、当該余剰額を発注者に返還しなければならない。</p> <p>3 受注者は、この契約が業務 <u>(追加)</u> の完了前に解除された場合において、貸与品等があるときは、当該貸与品等を発注者に返還しなければならない。この場合において、当該貸与品等が受注者の故意又は過失により滅失又はき損したときは、代品を納め、若しくは原状に復して返還し、又は返還に代えてその損害を賠償しなければならない。</p>	<p>(解除に伴う措置)</p> <p>第 51 条 この契約が業務等の完了前に解除された場合において、第 35 条 <u>(第 39 条の 3 において準用する場合を含む。)</u> の規定による前払金があったときは、受注者は、第 44 条、第 45 条、第 45 条の 2、第 45 条の 3 又は次条第 3 項の規定による解除にあつては、当該前払金の額 (第 39 条 <u>(削除)</u> の規定により部分引渡しをしているときは、その部分引渡しにおいて償却した前払金の額を控除した額) に当該前払金の支払いの日から返還の日までの日数に応じ年 10.75 パーセントの割合で計算した額の利息を付した額を、第 43 条、第 47 条又は第 48 条の規定による解除にあつては、当該前払金の額を発注者に返還しなければならない。</p> <p>2 前項の規定にかかわらず、この契約が業務等の完了前に解除され、かつ、前条第 2 項の規定により既履行部分の引渡しが行われる場合において、第 35 条 <u>(第 39 条の 3 において準用する場合を含む。)</u> の規定による前払金があったときは、発注者は、当該前払金の額 (第 39 条の規定による部分引渡しがあった場合は、その部分引渡しにおいて償却した前払金の額を控除した額) を前条第 3 項の規定により定められた既履行部分委託料から控除する <u>ものとする</u>。この場合において、受領済みの前払金になお余剰があるときは、受注者は、第 44 条、第 45 条、第 45 条の 2、第 45 条の 3 又は次条第 3 項の規定による解除にあつては、当該余剰額に前払金の支払いの日から返還の日までの日数に応じ年 10.75 パーセントの割合で計算した額の利息を付した額を、第 43 条、第 47 条又は第 48 条の規定による解除にあつては、当該余剰額を発注者に返還しなければならない。</p> <p>3 受注者は、この契約が業務等の完了前に解除された場合において、貸与品等があるときは、当該貸与品等を発注者に返還しなければならない。この場合において、当該貸与品等が受注者の故意又は過失により滅失又はき損したときは、代品を納め、若しくは原状に復して返還し、又は返還に代えてその損害を賠償しなければならない。</p>

改正前	改正後
<p>4 受注者は、この契約が業務（追加）の完了前に解除された場合において、作業現場に受注者が所有又は管理する業務（追加）の出来形部分（第17条の2第1項又は第2項に規定する部分引渡しに係る部分及び前条第2項に規定する検査に合格した既履行部分を除く。）、調査機械器具、仮設物その他の物件（第6条の規定により、受注者から業務（追加）の一部を委任され、又は請け負った者が所有又は管理するこれらの物件及び貸与品等のうち故意又は過失によりその返還が不可能となったものを含む。以下次項において同じ。）があるときは、受注者は、当該物件を撤去するとともに（追加）作業現場を修復し、取り片付けて、発注者に明け渡さなければならない。</p> <p>5 前項に規定する撤去又は原状回復若しくは取片付けに要する費用（以下この項及び次項において「撤去費用等」という。）は、次の各号に掲げる撤去費用等につき、それぞれ各号に定めるところにより発注者又は受注者が負担する。</p> <p>(1) 業務（追加）の出来形部分に関する撤去費用等 この契約の解除が第21条、第22条、第22条の2、第22条の3又は次条第3項によるときは受注者が負担し、第20条、第24条又は第25条によるときは発注者が負担する。</p> <p>(2) 調査機械器具、仮設物その他物件に関する撤去費用等 受注者が負担する。</p> <p>6 第4項の場合において、受注者が正当な理由なく、相当の期間内に当該物件の撤去（追加）又は作業現場の原状回復若しくは取片付けを行わないときは、発注者は、受注者に代わって当該物件の処分又は作業現場の原状回復若しくは取片付けを行うことができる。この場合において（追加）、受注者は、発注者の処分又は原状回復若しくは取片付けについて異議を申し出ることができず、また、発注者が支出した撤去費用等（前項第1号の規定により、発注者が負担する業務（追加）の出来形部分に係るものを除く。）を負担しなければならない。</p> <p>7 第3項前段に規定する受注者のとるべき措置の期限、方法等については、この契約の解除が第21条、第22条、第22条の2、第22条の3又は次条第3項の規定によるときは発注者が定め、第20条、第24条又は第25条の規定によるときは受注者が発注者の意見を聴いて定めるものとし、第3項後段及び第4項に規定する受注者のとるべき措置の期限、方法等については、発注者が受注者の意見を聴いて定めるものとする。</p> <p>8 業務（追加）の完了後にこの契約が解除された場合は、解除に伴い生じる事項の処理については発注者及び受注者が民法の規定に従って協議して決める。</p>	<p>4 受注者は、この契約が業務等の完了前に解除された場合において、作業現場に受注者が所有又は管理する業務等の出来形部分（第39条に規定する部分引渡しに係る部分及び前条第2項に規定する検査に合格した既履行部分を除く。）、調査機械器具、仮設物その他の物件（第7条第3項の規定により、受注者から業務等の一部を委任され、又は請け負った者が所有又は管理するこれらの物件を含む。以下この条において同じ。）があるときは、受注者は、当該物件を撤去するとともに、作業現場を修復し、取り片付けて、発注者に明け渡さなければならない。</p> <p>5 前項に規定する撤去並びに修復及び取片付けに要する費用（以下この項及び次項において「撤去費用等」という。）は、次の各号に掲げる撤去費用等につき、それぞれ各号に定めるところにより発注者又は受注者が負担する。</p> <p>(1) 業務等の出来形部分に関する撤去費用等 （削除）契約の解除が第44条、第45条、第45条の2、第45条の3又は次条第3項によるときは受注者が負担し、第43条、第47条又は第48条によるときは発注者が負担する。</p> <p>(2) 調査機械器具、仮設物その他物件に関する撤去費用等 受注者が負担する。</p> <p>6 第4項の場合において、受注者が正当な理由なく、相当の期間内に当該物件を撤去せず、又は作業現場の修復若しくは取片付けを行わないときは、発注者は、受注者に代わって当該物件の処分又は作業現場の修復若しくは取片付けを行うことができる。この場合においては、受注者は、発注者の処分又は修復若しくは取片付けについて異議を申し出ることができず、また、発注者が支出した撤去費用等（前項第1号の規定により、発注者が負担する業務等の出来形部分に係るものを除く。）を負担しなければならない。</p> <p>7 第3項前段に規定する受注者のとるべき措置の期限、方法等については、この契約の解除が第44条、第45条、第45条の2、第45条の3又は次条第3項の規定によるときは発注者が定め、第43条、第47条又は第48条の規定によるときは受注者が発注者の意見を聴いて定めるものとし、第3項後段及び第4項に規定する受注者のとるべき措置の期限、方法等については、発注者が受注者の意見を聴いて定めるものとする。</p> <p>8 業務等の完了後にこの契約が解除された場合は、解除に伴い生じる事項の処理については発注者及び受注者が民法の規定に従って協議して決める。</p>

改正前	改正後
<p>(発注者の損害賠償請求等)</p> <p>第 29 条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当するときは、これによって生じた損害の賠償を請求することができる。</p> <p>(1) 履行期間内に業務(追加)を完了することができないとき。</p> <p>(2) この契約の成果物に契約不適合があるとき。</p> <p>(3) 第 21 条、第 22 条、第 22 条の 2 又は第 22 条の 3 の規定により(追加)成果物の引渡し後にこの契約が解除されたとき。</p> <p>(4) 前三号に掲げる場合のほか、債務の本旨に従った履行をしないとき又は債務の履行が不能であるとき。</p> <p>2 次の各号のいずれかに該当するときは、前項の損害賠償に代えて、受注者は、業務委託料の 10 分の 1 に相当する額を違約金として発注者の指定する期間内に支払わなければならない。</p> <p>(1) 第 21 条、第 22 条、第 22 条の 2 又は第 22 条の 3 の規定により成果物の引渡し前にこの契約が解除されたとき。</p> <p>(2) 成果物の引渡し前に、受注者がその債務の履行を拒否し、又は受注者の責めに帰すべき事由によって受注者の債務について履行不能となったとき。</p> <p>3 次の各号に掲げる者がこの契約を解除した場合は、前項第 2 号に該当する場合とみなす。</p> <p>(1) 受注者について破産手続開始の決定があった場合において、破産法(平成 16 年法律第 75 号)の規定により選任された破産管財人</p> <p>(2) 受注者について更生手続開始の決定があった場合において、会社更生法(平成 14 年法律第 154 号)の規定により選任された管財人</p> <p>(3) 受注者について再生手続開始の決定があった場合において、民事再生法(平成 11 年法律第 225 号)の規定により選任された再生債務者等</p> <p>4 第 1 項各号又は第 2 項各号に定める場合(前項の規定により第 2 項第 2 号に該当する場合とみなされる場合を除く。)がこの契約及び取引上の社会通念に照らして受注者の責めに帰することができない事由によるものであるときは、第 1 項及び第 2 項の規定は適用しない。</p> <p>5 第 1 項第 1 号に該当し、発注者が損害の賠償を請求する場合の請求額は、業務委託料から既履行部分に相当する業務委託料を控除した額につき、遅延日数に応じ、年 10.75 パーセントの割合で計算した額とする。</p>	<p>(発注者の損害賠償請求等)</p> <p>第 52 条 発注者は、受注者が次の各号のいずれかに該当するときは、これによって生じた損害の賠償を請求することができる。</p> <p>(1) 履行期間内に業務等を完了することができないとき。</p> <p>(2) この契約の成果物に契約不適合があるとき。</p> <p>(3) 第 44 条、第 45 条、第 45 条の 2 又は第 45 条の 3 の規定により、成果物の引渡し後にこの契約が解除されたとき。</p> <p>(4) 前 3 号に掲げる場合のほか、債務の本旨に従った履行をしないとき又は債務の履行が不能であるとき。</p> <p>2 次の各号のいずれかに該当するときは、前項の損害賠償に代えて、受注者は、業務委託料の 10 分の 1 に相当する額を違約金として発注者の指定する期間内に支払わなければならない。</p> <p>(1) 第 44 条、第 45 条、第 45 条の 2 又は第 45 条の 3 の規定により成果物の引渡し前にこの契約が解除されたとき。</p> <p>(2) 成果物の引渡し前に、受注者がその債務の履行を拒否し、又は受注者の責めに帰すべき事由によって受注者の債務について履行不能となったとき。</p> <p>3 次の各号に掲げる者がこの契約を解除した場合は、前項第 2 号に該当する場合とみなす。</p> <p>(1) 受注者について破産手続開始の決定があった場合において、破産法(平成 16 年法律第 75 号)の規定により選任された破産管財人</p> <p>(2) 受注者について更生手続開始の決定があった場合において、会社更生法(平成 14 年法律第 154 号)の規定により選任された管財人</p> <p>(3) 受注者について再生手続開始の決定があった場合において、民事再生法(平成 11 年法律第 225 号)の規定により選任された再生債務者等</p> <p>4 第 1 項各号又は第 2 項各号に定める場合(前項の規定により第 2 項第 2 号に該当する場合とみなされる場合を除く。)がこの契約及び取引上の社会通念に照らして受注者の責めに帰することができない事由によるものであるときは、第 1 項及び第 2 項の規定は適用しない。</p> <p>5 第 1 項第 1 号に該当し、発注者が損害の賠償を請求する場合の請求額は、業務委託料から既履行部分に相当する業務委託料を控除した額につき、遅延日数に応じ、年 10.75 パーセントの割合で計算した額とする。</p>

改正前	改正後
<p>6 第2項の場合において、第4条の規定（第22条第8号及び第22条の2の規定によりこの契約が解除された場合にあつては第4条第1項第1号又は第2号の規定）により契約保証金の納付又はこれに代わる担保の提供が行われているときは、発注者は、当該契約保証金又は担保をもって同項の違約金に充当することができる。</p>	<p>6 第2項の場合において、第4条の規定（第45条第8号、第45条の2又は第45条の3の規定によりこの契約が解除された場合にあつては第4条第1項第1号又は第2号の規定）により契約保証金の納付又はこれに代わる担保の提供が行われているときは、発注者は、当該契約保証金又は担保をもって同項の違約金に充当することができる。</p>
<p>（損害賠償の予定） 第29条の2 受注者（追加）は、第22条の3第1項各号のいずれかに該当するときは、業務（追加）の完了の前後を問わず、又は発注者が契約を解除するか否かを問わず、損害賠償金として、契約金額の10分の2に相当する金額を発注者に支払わなければならない。ただし、同項第1号、第2号又は第3号に該当する場合において、当該命令の対象となる行為が昭和57年6月18日公正取引委員会告示第15号（不公正な取引方法）第6項に該当する行為である場合その他発注者が特に認める場合は、この限りではない。</p> <p>2 第1項の規定による損害賠償金は、発注者に生じた実際の損害額が同項に規定する損害賠償金の額を超える場合は、その超える額につきなお請求をすることを妨げるものではない。同項の規定により受注者が損害賠償金を支払った後に、実際の損害額が同項に規定する損害賠償金の額を超えることが明らかとなった場合においても、同様とする。</p> <p>（新設）</p>	<p>（損害賠償の予定） 第52条の2 受注者（設計共同体にあつては、その構成員。以下この条において同じ。）は、第45条の3第1項各号のいずれかに該当するときは、業務等の完了の前後を問わず、又は発注者が契約を解除するか否かを問わず、損害賠償金として、業務委託料の10分の2に相当する金額を発注者に支払わなければならない。ただし、同項第1号、第2号又は第3号に該当する場合において、当該命令の対象となる行為が独占禁止法第2条第9項の規定に基づき定められた不公正な取引方法（昭和57年6月18日公正取引委員会告示第15号）第6項に規定する不当廉価に該当する場合その他発注者が特に認める場合は、この限りで（削除）ない。</p> <p>2 前項の規定による損害賠償金は、発注者に生じた実際の損害額が同項に規定する損害賠償金の額を超える場合は、その超える額につきなお請求をすることを妨げるものではない。同項の規定により受注者が損害賠償金を支払った後に、実際の損害額が同項に規定する損害賠償金の額を超えることが明らかとなった場合においても、同様とする。</p> <p>3 前2項の規定による損害賠償金は、受注者が設計共同体であり、かつ、既に当該設計共同体が解散しているときは、発注者は、受注者の代表者であった者又は構成員であった者に請求をすることができる。この場合において、受注者の代表者であった者及び構成員であった者は、連帯して損害賠償金を発注者に支払わなければならない。</p>
<p>（受注者の損害賠償請求等） 第30条 受注者は、発注者が次の各号のいずれかに該当する場合はこれによって生じた損害の賠償を請求することができる。ただし、当該各号に定める場合がこの契約及び取引上の社会通念に照らして発注者の責めに帰することができる事由によるものであるときは、この限りでない。 (1) 第24条又は第25条の規定によりこの契約が解除されたとき。 (2) 前号に掲げる場合のほか、債務の本旨に従った履行をしないとき又は債務の履行が不能であるとき。</p>	<p>（受注者の損害賠償請求等） 第53条 受注者は、発注者が次の各号のいずれかに該当する場合はこれによって生じた損害の賠償を請求することができる。ただし、当該各号に定める場合がこの契約及び取引上の社会通念に照らして発注者の責めに帰することができる事由によるものであるときは、この限りでない。 (1) 第47条又は第48条の規定によりこの契約が解除されたとき。 (2) 前号に掲げる場合のほか、債務の本旨に従った履行をしないとき又は債務の履行が不能であるとき。</p>

改正前	改正後
<p>2 第13条第2項(第17条の2において準用する場合を含む。)の規定による業務委託料の支払いが遅れた場合においては、受注者は、未受領金額につき、遅延日数に応じ、年10.75パーセントの割合で計算した額の遅延利息の支払いを発注者に請求することができる。</p>	<p>2 第33条第2項(第39条において準用する場合を含む。)の規定による業務委託料の支払いが遅れた場合においては、受注者は、未受領金額につき、遅延日数に応じ、年10.75パーセントの割合で計算した額の遅延利息の支払いを発注者に請求することができる。</p>
<p>(契約不適合責任期間等) 第31条 発注者は、引き渡された成果物に関し、第12条(追加)第4項(第17条の2)においてこれらの規定を準用する場合を含む。)の規定による引渡し(以下この条において単に「引渡し」という。)を受けた日から3年以内でなければ、契約不適合を理由とした履行の追完の請求、損害賠償の請求、代金の減額の請求又は契約の解除(以下この条において「請求等」という。)をすることができない。</p> <p>2 前項の請求等は、具体的な契約不適合の内容、請求する損害額の算定の根拠等当該請求等の根拠を示して、受注者の契約不適合責任を問う意思を明確に告げることで行う。</p> <p>3 発注者が第1項に規定する契約不適合に係る請求等が可能な期間(以下この項及び第6項において「契約不適合責任期間」という。)の内に契約不適合を知り、その旨を受注者に通知した場合において、発注者が通知から1年が経過する日までに前項に規定する方法による請求等をしたときは、契約不適合責任期間の内に請求等をしたものとみなす。</p> <p>4 発注者は、第1項の請求等を行ったときは、当該請求等の根拠となる契約不適合に関し、民法の消滅時効の範囲で、当該請求等以外に必要と認められる請求等を行うことができる。</p> <p>5 前各項の規定は、契約不適合が受注者の故意又は重過失により生じたものであるときには適用せず、契約不適合に関する受注者の責任については、民法の定めるところによる。</p> <p>6 民法第637条第1項の規定は、契約不適合責任期間については適用しない。</p> <p>7 発注者は、成果物の引渡しの際に契約不適合があることを知ったときは、第1項の規定にかかわらず、その旨を直ちに受注者に通知しなければ、当該契約不適合に関する請求等を行うことはできない。ただし、受注者がその契約不適合があることを知っていたときは、この限りでない。</p>	<p>(契約不適合責任期間等) 第54条 発注者は、引き渡された成果物に関し、第32条第3項又は第4項(第39条)においてこれらの規定を準用する場合を含む。)の規定による引渡し(以下この条において単に「引渡し」という。)を受けた日から3年以内でなければ、契約不適合を理由とした履行の追完の請求、損害賠償の請求、代金の減額の請求又は契約の解除(以下この条において「請求等」という。)をすることができない。</p> <p>2 前項の請求等は、具体的な契約不適合の内容、請求する損害額の算定の根拠等当該請求等の根拠を示して、受注者の契約不適合責任を問う意思を明確に告げることで行う。</p> <p>3 発注者が第1項に規定する契約不適合に係る請求等が可能な期間(以下この項及び第6項において「契約不適合責任期間」という。)の内に契約不適合を知り、その旨を受注者に通知した場合において、発注者が通知から1年が経過する日までに前項に規定する方法による請求等をしたときは、契約不適合責任期間の内に請求等をしたものとみなす。</p> <p>4 発注者は、第1項の請求等を行ったときは、当該請求等の根拠となる契約不適合に関し、民法の消滅時効の範囲で、当該請求等以外に必要と認められる請求等を行うことができる。</p> <p>5 前各項の規定は、契約不適合が受注者の故意又は重過失により生じたものであるときには適用せず、契約不適合に関する受注者の責任については、民法の定めるところによる。</p> <p>6 民法第637条第1項の規定は、契約不適合責任期間については適用しない。</p> <p>7 発注者は、成果物の引渡しの際に契約不適合があることを知ったときは、第1項の規定にかかわらず、その旨を直ちに受注者に通知しなければ、当該契約不適合に関する請求等を行うことはできない。ただし、受注者がその契約不適合があることを知っていたときは、この限りでない。</p>

測量・調査業務等委託契約新旧対照表

改正前	改正後
<p>8 引き渡された成果物の契約不適合が設計図書の記載内容、発注者の指示又は貸与品等の性状により生じたものであるときは、発注者は当該契約不適合を理由として、請求等を行うことができない。ただし、受注者がその記載内容、指示又は貸与品等が不相当であることを知りながらこれを通知しなかったときは、この限りでない。</p>	<p>8 引き渡された成果物の契約不適合が設計図書の記載内容、発注者の指示又は貸与品等の性状により生じたものであるときは、発注者は当該契約不適合を理由として、請求等を行うことができない。ただし、受注者がその記載内容、指示又は貸与品等が不相当であることを知りながらこれを通知しなかったときは、この限りでない。</p>
<p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(保険)</u> <u>第 55 条 受注者は、設計図書に基づき火災保険その他の保険を付したとき又は任意に保険を付しているときは、当該保険に係る証券又はこれに代わるものを直ちに発注者に提示しなければならない。</u></p>
<p><u>(違約金等の徴収)</u> 第 32 条 受注者が、この契約に基づく<u>違約金、遅延利息及び賠償金を</u>、発注者の指定する<u>期限まで</u>に支払わないときは、発注者は、その支払わない額に、発注者の指定する<u>期限</u>を経過した日から、<u>受注者の支払 (追加) 日までの日数につき、年 10.75%</u>の割合で計算した<u>遅延利息を加えた額</u>を徴収する。</p> <p>2 前項の場合において<u>請負代金支払額があるときは、発注者の支払うべき請負代金と相殺して徴収し、なお、不足があるときは追徴する。</u></p> <p><u>(新設)</u></p>	<p><u>(賠償金等の徴収)</u> 第 56 条 受注者が <u>(削除)</u> この契約に基づく <u>賠償金、損害金又は違約金を</u> <u>(削除)</u> 発注者の指定する<u>期間内</u>に支払わないときは、発注者は、その支払わない額に <u>(削除)</u> 発注者の指定する<u>期間</u>を経過した日から<u>業務委託料支払いの日まで (削除) 年 10.75 パーセント</u>の割合で計算した<u>利息を付した額と、発注者の支払うべき業務委託料とを相殺し、なお不足があるときは追徴する。</u></p> <p><u>(削除)</u></p> <p>2 前項の追徴をする場合には、<u>発注者は、受注者から遅延日数につき年 10.75 パーセントの割合で計算した額の遅延利息を徴収する。</u></p>
<p><u>(個人情報の保護)</u> 第 34 条 受注者は、この契約による事務を処理するための個人情報の取扱いについては、別記「個人情報取扱特記事項」を守らなければならない。</p>	<p><u>(個人情報の保護)</u> 第 57 条 受注者は、この契約による事務を処理するための個人情報の取扱いについては、別記「個人情報取扱特記事項」を守らなければならない。</p>
<p><u>(契約外の事項)</u> 第 35 条 この<u>約款</u>に定めのない事項については、必要に応じて、発注者と受注者とが協議して定めるものとする。</p>	<p><u>(契約外の事項)</u> 第 58 条 この<u>契約書</u>に定めのない事項については、必要に応じて発注者と受注者とが協議して定める。</p>